

ブルーストと語源学

藤田省一

中世建築の歴史とは光と闇との闘争の歴史だということもできるでしょう。光をもってほとんど非物質的な教会を造る遊びがパリのサント＝シャペルやトロワイエスのサン＝チュルバンには炸裂しています。石はそこでは光と色彩に場所を譲って消え失せてしまっているかのようです。

——エミール・マール

今この時、1923年3月、ここクロイツリンゲンの閉ざされた診療所において私は自分が、イスラエルから北ドイツの肥沃な平原に移植されイタリア産の小枝が接ぎ木された樹の木片で出来た地震計であるような気がしており……

——アビ・ヴァールブルク

マルセル・ブルースト（1871-1922）の『失われた時を求めて』は題名の如くひとつの「探究」を軸に展開する小説だが¹、語り手「私」の探究が不断のそしてさまざまな困難に遭遇するのは読まれる通りである。これまでの研究によって、大雑把に第一篇『スワン家の方へ』と第七篇『見出された時』とに相当する部分および両者をつなぐ部分が別の題名の下にまず構想されたことがわかっている。中間部分が当初の計画を大きく超えて膨んでいったということだ。ところで、語り手の遭遇する困難はある程度までは読者の直面する困難でもある。中間部の膨脹ぶりはこの小説の結構をししばしば見失わせるからだ。

もっとも、導きの糸のひとつが名前であることは本論を俟つまでもなく夙に指摘されており、名前（固有名詞）がどのようにテキストを展開させているか、またいかにして名前がこの作品の創造を可能にしたかといった問題が論じられるようになってすでに久しい。最も早い時期に『失われた時を求めて』における名前の働きに注目したものとしては例えばヴァンドリエス（1875-1960）の「マルセル・ブルーストと固有名詞」²がある。「名前 le nom は小説構築の営みすべての基礎となり中枢となる。主体における想像力が、名の表象する物体に対してそうした営みを行なうのである」³と述べるヴァンドリエスがしかし言語理論の観点から見た名前の働きよりむしろ、作家が「間違ったやり方で」利用しているという語源学的デイスクールへの注意を喚起することに力を注いでいるのは、メイエの弟子筋に当る比較文法（さらに文献学・ケルト学）の専門家として当然というべきだろうが、ブルーストの「語源学的脱線 divagations」⁴が彼の関心を惹いたことにはおそらくそれ以上の本質的な問題が孕まれている。本論にいう「語源学」とは、ブルーストが着目したかぎりでの語源学ならびに系譜学を緩やかに指すものだが、それらの知において語と語、名と名の間に系譜関係 filiations を打ち立て、起源に向かって遡ることを可能にしてくれるはずの糸は『失われた時を求めて』においてしばしば断ち切られることになるからだ。

系譜が断たれているということは起源に到達することがついになわぬということの意味するだろうし、少なくとも過去への遡行が不安定で危険に充ちた歷程へと変わってしまうのは間違いない。あるいは過去に向かう行程そのものによって系譜上の断絶が生み出されるというべきかもしれないが、そのようなにして、そしてそのようにしてこそ『失われた時を求めて』が出来上がったのだとすれば、

¹ 初めからこの名が与えられていたわけではないが、ひとたび採用された後は他の名に地位を譲ることはなかったのだから本論ではひとまずは素直に受け取っておくことにしたい。

² Joseph VENDRYES, « Marcel Proust et les noms propres », dans *Mélanges de philologie et d'histoire littéraire offerts à Edmond Huguet par ses élèves, ses collègues et ses amis* (réimpression de l'édition de Paris, 1940), Genève, Slatkine, 1972.

³ *Ibid.*, p. 120.

⁴ *Ibid.*, p. 126.

つまりそれこそが現代における藝術創造の条件のひとつなのだとすれば、作家はやはり出発するほかない。語源学的「脱線」は主として第一篇『スワン家の方へ』および第四篇『ソドムとゴモラ』に現れるのだが、後者が示すだろう「同性愛」と語源学との関わりについては詳細を別の機会に譲ることとし、本論ではブルーストの語源学的ディスクールがどのように作られているかの素描が目指される。

1

「失われた時」の探究が安定を欠いた彷徨のごときものになるのは、他方で世界が不断に変化してゆくからでもある。十九世紀から二十世紀にかけてのフランスの現実における貴族階級がどのようなものであったかはともかく⁵ 小説中ではその栄華の翳りなど夢想だにしなかったゲルマント家の地位しかり、その美しさが一度ならず言及される召使フランソワーズのフランス語もまたしかり。最終篇『見出された時』の「ゲルマント大公夫人邸の午後のパーティ」などを読むと、むしろ唐突に変化が起こるという語り手がそれに突然気づくような仕方では書かれているけれども、主要な登場人物についてはその変化（容貌の、人格の）は全篇を通じて語られてきている。例えばシャルリュス男爵。まだ名前の定まらぬうちから凋落すべく運命づけられていたこの人物が最後に見舞われる「全的な変動、冶金学的変容 *altération métallurgique*」[TR, IV, 438]⁶ は、語り手が見出すべき「永遠の時」⁷ を照らし出すべき老化以上のものである。戦後のパリでゲルマント大公夫人の午餐に招待された語り手は館に向かう途上でシャルリュスに出会う。結果的にこれが最後の対面となってしまうのだが、それまで概ね美丈夫として描かれてきた老男爵は次のような変貌ぶりを示す。

彼の帽子は人の手が入っていない密林のように伸び放題の白髪を垣間見せていた。伸びっ放しの顎髭も公園の河神の像に降り積もった雪のように白くなっていた。それは、脳卒中から回復したばかりで、世話を甲斐甲斐しく焼くジュピアンにかしづかれたシャルリュス氏だった。卒中の発作は「…」、それまでやっていたように手間をかけて髪を染めることを禁止されたというのではないとすれば、その顎髭と髪の間歇泉のように噴出させる金属、それが溢れ出たことでいまや髪は完全な銀色になっているのだが、その金属のすべてを化学物質が沈殿したかのように *une sorte de précipité chimique* 目に見える形で輝かせていた「…。」[TR, IV, 438]

病に倒れる以前——それはヨーロッパ大戦勃発以前のことであるのだが——よりすでに「怪物」[P, III, 709] などと呼ばれていたにせよ有機体であるには違いない彼の身体が金属の譬喩によって描写されている点に注意しよう。いや、金属であることよりむしろそれがあたかも彼の肉体の内側から流れ出てきたかのように書かれている点こそが重要なかもしれない。水銀のような流体が思い描かれているのだろうが、少し先の箇所を読むことのできる、かつては下級で無価値の貴族であるとして一顧だにしなかったサン＝トゥーヴェルト夫人に深々と礼をしようと脱帽したとたん「そこから銀を含んだ奔流によって金属化した波 *les flots métallifiés de torrentes argentifères* が流れ出す」[TR, IV, 439] といった大仰な所作に対する「弔辞 *oraison funèbre* としての雄弁な身ぶり」⁸ という譬喩は、印刷稿ではより直截的に「ボシュエの雄弁とともに銀髪の奔流が流れ出る」[TR, IV, 439] へ変更されている。ソフォクレスのそれとともに

⁵ 「貴族階級も『社交界』では威光を保っており、そのことは決して過小評価されてはならないけれども、やはり彼らが社会的に力をもつのは大ブルジョワと融合する限りにおいてでしかなかった。そうした融合 *fusion* は婚姻 *alliances matrimoniales* として理事会等への参与によって達成されてきた」(Jean-Marie MAYEUR, *Les débuts de la III^e République 1871-1898*, Seuil, coll. « Points », 1973, p. 85-86)。

⁶ 『失われた時を求めて』本文からの引用はいわゆるプレイアード新版 Marcel PROUST, *A la recherche du temps perdu* (1913-1927), édition publiée sous la direction de J.-Y. Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., I, 1987; II et III, 1988; IV, 1989. により、本文中に「各篇の略号、巻数、頁数」の形で示す。略号は以下の通り。

(1) Sw : *Du côté de chez Swann* 『スワン家の方へ』; (2) JF : *A l'ombre des jeunes filles en fleurs* 『花咲く乙女たちのかげに』; (3) G : *Le Côté de Guermantes* 『ゲルマントの方』; (4) SG : *Sodome et Gomorre* 『ソドムとゴモラ』; (5) P : *La Prisonnière* 『囚われの女』; (6) AD : *Albertine disparue* (ou *La Fugitive*) 『消え去ったアルベルチヌ／逃げ去る女』; (7) TR : *Le Temps retrouvé* 『見出された時』。なお同版の本文以外の箇所の参照は RTP によって表す。

⁷ 「失われた時」すなわち過去だとすると、過去を媒介として「永遠」が見出されるという構図を認めることができる。

⁸ 草稿「カイエ 51」*Ébauche du Cahier 51* (ff^{es} 19 à 20 r^o, 1909), *Matinée chez la princesse de Guermantes*, p. 64; Esquisse XXIII.1. RTP, IV, 795.

言及されるボシュエの名は、実際にシャルリュスがその後でぶつ「追悼演説 oraison funèbre」[TR, IV, 441]がまさに「銀鉦脈 gisements argentés」と化したその肉体からの迸りであることを単なる譬喩を超えて告げているように思われるのだ。流体が「沈殿」してしまったのは、彼が脚力を失って車椅子に頼らねばならなくなった事態と対応しているのだろう。その「鉦脈」がすでに尽きてしまったというわけである。語り手にとって「失われた時」の記憶が脳の奥底に横たわる「鉦脈」のようなものだったことを勘案すれば⁹、金属の譬喩も決して奇異ではないし、物質が本来備わっているはずの硬度を失って流れ出すことが記憶と関わっていると考えるのはそれほど無理なことではない。

こうした変容はしかし突然訪れたわけではなく、早くから少しずつ準備されてきたものである。その始まりにあるのは、同様に大きく変容することになる別のものを襲うある変化だとわたくしは考えている。別のものとはコンプレの教会であるが、草稿研究によって、ゲルマント家の面々がテキストの次元においてこの教会と緊密に結びついていることが明らかになっており、テキストの次元において人と建築物といった区別を立てることはほとんど不可能なのである。そこでまずコンプレの教会の生成過程を簡単に追ってみることにしよう。

コンプレの教会へと降りてくる系譜（われわれとしてはとりあえずこの系譜を辿りうるものと信じるほかない）を遡ると、1908年頃「カイエ7」に書かれたらしい「（ゲルマントの）僧院」に逢着する。この時期にブルーストが取り組んでいたのは現在『サント＝ブーヴに反論する』としてまとめられる一群のテキストだが、石木隆治は「八世紀」に建造され「神父たちの墓」¹⁰を従えたこの僧院をめぐる文章が、『サント＝ブーヴに反論する』の放棄を経て、『失われた時を求めて』のコンプレの教会と、とりわけ第三篇『ゲルマントの方』を中心に展開されるゲルマント一族についての叙述とに再利用されたと述べている¹¹。塔の如く聳え立つものの高さを示す形容詞がsublimeからaltièreへと変更される[G II, 313]など、そっくり「そのまま」の再利用とはいえないのだが、その主張はひとまず受け入れてよいだろう。

コンプレの教会の成立過程を、その建築の「古さ」の価値をめぐる語り手と司祭との対立という観点から研究したケマールの論文¹²によれば、下書き（「カイエ7・6・12・8」、1908-09年）からタイプ原稿（1909-12年）へと下るにつれて、司祭の人物像は歴史的な逸話の語り部へと「統合」されてゆき、対する語り手「私」の「詩的想像力」は、次第に膨らんでゆく教会建築の細部の描写によっていつそう強まってゆくという。その細部とは要するに墓石とステンドグラスなのだが¹³、最初わずか「三行」に収まっていた墓石の描写は下に読まれる通り大きく膨れあがり、ステンドグラスに対してもより多くの言葉が費されるようになる¹⁴。ケマールは、「ゲルマントの僧院」は「広場の上空に高く聳えながら、かつて聖王ルイを見、今もなお彼を見つめているかのような塔」[Sw, I, 61]に唯一痕跡をとどめるに過ぎず、それ以外の例えば「時」の形象化であるといった属性は、「ふたつの方」すなわちコンプレの教会とゲルマント一族とに分配され受け継がれたことを指摘している¹⁵。教会は「四つの次元——時こそがその四番目の次元なのだが——に拡がり」[Sw, I, 60]、対してゲルマントは、サン＝チレーの前身にあたる教会をかつて焼き払って消失させたジルベール・ル・モーヴェの子孫という「系譜 lignage」を与えられることになるというわけだ¹⁶。

それゆえコンプレの聖堂¹⁷に作用する変化は「時の次元」において考えられなければならない。より正確にいい直すなら、時間と関わっていることは確かだがそれがシャルリュスにおける同様に、単純な経年変化とは別の変化と見なされねばならないということだ。したがってまた、墓石ならびにステンドグラスの変化も同様の観点

⁹「私の脳は豊かな鉦脈で、そこには広大な地域にわたって極めて多岐に分かれた貴重な地層がある」[TR, IV, 614]。

¹⁰« Noms de personnes », *Contre Sainte-Beuve*, édition établie par B. de Fallois, Gallimard, 1954, p. 276. 「カイエ7」を直接参照することはできなかったので引用はブレイアード新版に転写されたものかファロワ版『サント＝ブーヴに反論する』による。

¹¹石木『マルセル・ブルースト オランダへの旅』青弓社、1988年、56-57頁。

¹²Claudine QUÉMAR, « L'Église de Combray, son curé et le Narrateur (trois rédactions d'un fragment de la version primitive de Combray) », dans *Études proustiennes I*, Gallimard, coll. « Cahiers Marcel Proust », nouvelle série, t. VI, 1973.

¹³友人に宛てた書簡を信じるなら当時ブルーストは「貴族についての研究」「ステンドグラスについての研究」「墓石についての研究」などに取り組んでいた。Voir *Lettre à Louis d'Albufera*, le 5 ou 6 mai 1908, *Correspondance*, édition établie par Ph. Kolb, Plon, 21 vol., 1970-1993, t. VIII, p. 112-113.

¹⁴*Ibid.*, p. 284-285.

¹⁵*Ibid.*, p. 285-286.

¹⁶*Ibid.*, p. 287.

¹⁷「バルベックの大聖堂」[G, II, 649]といった表現に端的に表れているように、架空のものについてはcathédraleとégliseとが体系的には区別されていなかった節がある。気づいた限りで訂正した形跡も認められるのだが最終的には統一されぬままになってしまった。Voir *RTP*, II, 1713.

から考究される必要があるだろう。その場合の時間が「系譜」によって表されるような時間であることはいうまでもない。そしてブルーストの小説では一般に人物はまずその名前や言葉遣いによって造りあげられるのだから、結局シャルリュスの変容は名前や語源学といった問題系に属することになるわけである。ところで、ブルーストの系譜（学）は起源から終着点に向かって（あるいは終着点から起源に向かって）一方向的に時間が進んでゆくようなものではない。『失われた時を求めて』の世界において人や物が確実に老いてゆく一方で同時に語り手は、そしておそらく作家も、目指すべき起源の探究を推し進めなければならないからだ。テキストに何らかの推進力が働くのだとして、この場合は（ごく単純化して）相反する二方向への運動のうちに同時に身を置くことによって生れる力が作用しているはずである。具体的にどのような作用であるかについては以下の論述に譲りたいが、それが過去の探究を思いのほか困難なものにしていると考えてよいのではないだろうか。

コンブレの教会に戻ろう。上述のようにして生成された教会はしかし最終的に破壊されてしまう。グラッセ版『スワン家の方へ』を承けてなされるはずだった第二篇の刊行がヨーロッパ大戦開戦によって繰り延べられる間にそうした新たなアイデアが生まれたことはよく知られているけれども¹⁸、実際には『スワン家の方へ』において早くも崩壊の兆しが顕れていたことに注目されたい。小説中最も名高い挿話のひとつ、マドレーヌを溶かしこんだ紅茶が喚び起こすというコンブレの往事の記憶の中で、その町を「要約し象徴する」[*Sk*, I, 380-381] というサン＝チレール教会に舗かれた墓石が「蜂蜜のように」溶け出すからである。

私たちがそこから入ってゆく、黒ずんで一面あばたのように穴を穿たれた教会の古い玄関は（われわれが導かれつつある聖水盤がそうであるように）石材の角のところで割られたり深く抉られたりしていた。それはあたかも、中に入ってゆく農婦たちの外套がやわらかく摺れたり聖水をつける彼らの手指がおずおずと触れたりすることが何世紀にもわたって繰り返えされると破壊的な力を獲得して石をたわませでもしたかのような、また境界石を毎日轢いて進む荷車が轍をつけるようなやり方でそこに溝を掘りつけてでもしたかのようなだった。墓石の下では埋葬されたコンブレの神父たちの高貴な遺骸が内陣のいわば精神的な舗石となっていたが、その墓石はもはや生命をもたぬ堅い物質ではなかった、というも時がそれをやわらかくして本来の四辺形にからだどっていた縁から蜂蜜のように流れ出させていたからである。流れ出した石はこちら側に向かって花のようなゴシック体の大文字を押し流して波間に漂わせ、大理石の白いすみれの花を溺れさせながら、黄金色の波となって矩形の境界を越え出ている。境界線の向こう側では逆に四辺の内側に向かって吸収され、もともと略されてあるラテン語の碑銘をいつそう収縮させるばかりか、ある語の中の二文字を接近させ他の文字をかぎりなく引き離すという気まぐれさえ起こして簡約された銘の文字の排列を変形させていた。[*Sk*, I, 58]

一読しただけでは、なるほど荒唐無稽ではあるものの結局は単に長い時間がこうした物質の変容を可能にしたという風に理解されるかもしれない。だが、石はどれほど長い時間を経ようとそれだけで液体になりはしない。前身にあたる教会がジルベール・モワーズ悪魔王によって焼かれたことに対応すると考えられぬでもないが、そしてそのことが記憶されている限りにおいてこの墓石の変化はある凶々しさを免れえないわけだが、

¹⁸ グラッセ版を改訂した1919年のNRF版でコンブレの位置は「シャルトル」近郊からフランス軍がドイツ軍と対峙する戦線上の「ランス」近郊へと変更されることになる。

¹⁹ すでに『スワン家の方へ』のタイプ原稿が出来上がりそこからの抜萃が『フィガロ』紙に発表されていた時期にブルーストは、墓碑銘に関する質問を美術史家マールに投げかけている。作家がマールの研究書の記述をほとんどそのまま拝借して登場人物に語らせたこと[JF, II, 198]はよく知られており、事実、彼はマールの『フランス十三世紀の宗教美術』（1898年）をその出版の翌年友人に借りていたり、またラスキン著『アミアンの大聖堂』のフランス語訳の際に参照するなど、早い時期から多くを学んだようである。「新聞に掲載されましたこのエッセイは貴殿に御相談申し上げようとしている小説の一部です。[…] 私が墓石の描写で強調している簡約された銘文 *caractères abrégés* に関して申しますと、その中には固有名詞がなければなりません。お尋ねしたいのは、例えばアミアンの司教の墓などに *superbis* と彫る代わりに「*supbis*」と短縮するようなやり方 […] についてです」(Lettre à Émile Mâle, vers la mi-juin 1913, *Correspondance*, t. XVII, p. 552.)。「エッセイ」とは先の引用部分を含む抜萃および新たに付け加えられた断片からなる掌篇「村の教会」のことだが(1912年9月3日付『フィガロ』紙掲載。 Voir PROUST, « L'Église de village », dans *Chroniques*, Gallimard, 1927.)、マールとはかねてから交流があったためある程度気安く、つまり考え抜いた挙げ句のというわけでは必ずしもないような質問を投げかけることができた可能性は排除しえないけれど

テキストが帯びているのはにもかかわらず何か新しいものの誕生や再生を祝いでもするかのような調子である。柔らかくなるのが他ならぬ墓であってみればいずれにせよ無邪気な祝福ではありえないけれども、「蜂蜜」や「黄金の波」といった語句が与える幸福で豊饒なイメージを否定しきすることは難しい。もともと、ここで黒白をつけることが求められているのではない。重要なのは、「蜂蜜のように流れ出す」のが唯の石ではなく墓石である点、つまりこの流体が碑銘、したがって名前¹⁹に働きかけを行なっている点である。

墓が溶けて流れ出す。それが始まりである。だがおそらく、1908年頃と推定される『サント＝ブーヴに反論する』のための下書き（「カイエ2」）で教会の消滅が示唆されていなければこの墓石の変形は不可能だったに違いない。草稿段階では「蜜」が「人間の灰」の成り代わりであることがはっきりと書かれていたのがわかる。

古い大聖堂の内側にいても、美、穹窿に表現された永遠についての思想、ステンドグラスの彫刻細工、そういったものだけでは十分でなくなる。われわれが望むのは個々人、死者、そして彼らの生がほとんど非物質化され尽くしてなお残っているものなのである。われわれはだから視線を落として敷き詰められたこれら墓石を、墓石に覆われた人間的な、思考する、ほとんど実体のない、われわれの教会の舗石となっている人間の灰を見る。[時がそれら墓石を溶かしてしまい……]²⁰

ブルーストは『失われた時を求めて』の第一稿ともいべき未完の『サント＝ブーヴに反論する』執筆に先立つ1904年、第三共和国の推し進める世俗化政策への異議として「大聖堂の死」というエッセイを『フィガロ』紙に寄せている。政府による政策強化を承けての、すでに死んでしまったものに対する哀惜の表明として書かれたのかそれとも来るべき死の予感に対する震えを記録したものだったかはともかくとして、この時評は結果的にコンブレの教会の死を予示するものとなってしまった。むろん、『スワン家の方へ』の原稿が出来上がりつつあった1912年から13年にかけてのヨーロッパは平和を貪ることを許される状況にはもはやなかったとはいえブルーストがコンブレの教会の破壊を構想しながら問題の墓石のパッセージを作り上げたということとはできない。それはアナクロニズムである。常識的に考えて上の一節は、1904年の「大聖堂の死」の問題意識が別の形を取ったものだろう。聖堂だけではもはや十分でないというのと、聖堂は必要ない（だから破壊されてよい）というのとでは意味合いが異なるからだ。確かにこれだけでは聖堂の「死」を導くにまだ十分とはいえない。しかし一方で、聖堂の擁護がもはや全肯定されていないこともまた同様に確かなのである。「大聖堂の死」では人々は「教会に入り、自分の場所を得て死後もそれを確保し続ける」²¹と書かれていたのが、次章でも見るように1916-19年の自筆清書カイエ（『ゲルマントの方』印刷稿が依拠したもの）では「われわれの記憶や心はどこまでも忠実にいられるほど大きなものではない。現在の思考の中にわれわれはそれほど広い空間をもち合わせてはいないので、生者の隣に死者をとどめておくことはできないのだ」[G, II, 821]という認識に変わっている点に注意されたい。NRF版『スワン家の方へ』に始まる1919年以降の『失われた時を求めて』において「大聖堂の死」という命題は新たな文脈を与えられたことになるからだ。戦争がそこにいくらかでも関与しているのは間違いなからう、コンブレは要するに破壊されるために戦線上へと移されたに等しいのだから。だがそれ以上に重要なのは、戦火の開かれる以前よりすでに（遅くとも「カイエ2」のパッセージが書かれた1908年には）その新たな文脈が胎動してい

も、美術史家が別の著作で「われわれがこの書物において研究する時代は墓の時代である」（MÂLE, *L'Art religieux de la fin du moyen âge en France : étude sur l'iconographie du moyen âge et sur ses sources d'inspiration* (1908), 5^e édition, Armand Colin, 1949, p. 392.) などといていることも勘案するなら、いずれにせよブルーストにとってはこの問題についての格好の相談相手だったと見てよい。もともと、この手紙のやり取りを経たグラッセ版ならびにNRF版『スワン家の方へ』においても具体的な名前なり言葉なりはついに書かれぬまま終わるのは読まれる通りである。なお引用文中の強調は断りのないかぎり原著者によるものである。

²⁰ Ébauche du Cahier 2 (ff^{es} 19 r^o à 18 v^o, 1908-1909), Esquisse XXIII, RTP, I, 729.

²¹ « La Mort des cathédrales », *Contre Sainte-Beuve*, édition établie par P. Clarac et Y. Sandre, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 149.

たことである。

繰り返すと、ブルーストが大聖堂のいわば「第二の死」を予言したということではない。彼は予感したのである、時の中での物事の変化を、そして藝術創造を可能にする条件が足下から溶けだして危機にさらされる——というよりむしろその溶解そのものが創造の条件なのだという。それを一般的な命題に還元することなく墓石の変形するイメージに昇華させた点にブルーストの独創があるのだと思う。それはただの堅い物質ではない、名前の刻まれた石だからである。石が溶け、碑銘の「文字」の排列を変形させながら名前を推し流す。それが『失われた時を求めて』のテキストの推進力のひとつだというのは決して穿ちすぎではあるまい。わたくしは墓石のこのような変容ぶりがブルースト的「語源学」のひとつのイメージだと考えている（いまひとつのイメージはステンドグラスであるがそれは後に触れる）。最終篇『見出された時』で語り手は、小説の題材となるべき祖母やアルベルチヌの死に思いをめぐらせつつ「一冊の本は大部分の墓の名前が消えてしまってもはや読むことができぬような大きな墓地である」[TR, IV, 482]と述懐するのだが²²、問題の墓もまた「名前が消えてしまってもはや読むことができぬ」墓碑のうちに数えられるのだろうか。それに直接答える代わりにまず本章でブルースト的「語源学」を概観しておきたい。

現代の記号学・構造言語学の観点からすると、名前つまり固有名詞は扱いに困る、というよりむしろ扱うことのできないものである。言語学的畸形といってもよい。諄々説明する必要もあるまいが、記号学において記号 *signe* は指示機能 *désignation* をもたないことになっているからだ。記号は現実・外界から独立し自律したシステムを構成する。システムの項としての記号は他の項との間の差異、つまり互いに異なった項であるということによって、そしてそれによってのみ意味作用 *signification* を有するのであり、指示し参照すべき現実の意味作用の構成要素にはならないとされる。ひるがえって固有名詞は一般に、意味作用ではなく指示作用によって固有の名前となる。術語の文字通りの意味に拘泥してもあまり実はあるがらないけれども、たとえば同名の人間が複数存在するといった事態が示してもいる通り、固有名詞における固有性とは敢えていうなら語義ではなく固有名詞をその中に含む発話の具体性にあるわけだ。ところで、詳しい論証は割愛せざるをえないけれども、ブルーストの言語観は結局のところ構造言語学以前ののものであって、記号分析によってそのすべてを明らかにすることは不可能である。時間が捨象されてしまうからだ。必要なのはむしろ時間を捨象しない言語論であり、われわれがブルースト的「語源学」に注目する理由はそこにある。『失われた時を求めて』における語源学（『スワン家の方へ』および『ソドムとゴモラ』）の源泉はこれまでの研究によってある程度まで明らかになっている²³。当時手に入れることのできた語源についての書物からそのまま採り入れられたものやそれを作家が部分的に改変したもの、あるいは全くの「夢想」によって作り上げられたものなど多彩な出自をもつ語源が主としてコンプレの司祭とソルボンヌの教授の口を通して語られるわけだが、前章で触れたヴァンドリエスがこれら語源学談義に注目した理由は要するに、音韻変化の規則に通じていない素人が出鱈目な語源学を弄んでいるということ、そして小説家や市井の人々がこれほどまでに語源に興味を抱く理由がわからないということである。後者に関しては、語源学と「性的倒錯」との親和性を論じたコンパニョンの興味深い研究がある。わたくしは完全には同意しないし、また本論では紙幅の関係で十分に検討することができないけれども、本質的な問題に触れているのは間違いない²⁴。

前者に関しては本論の射程を越え出る問題ゆえ論評は控えるほかないが、ただ、ヴァンドリエスが「固有名詞は一般名詞の特殊化だ」²⁵と述べていることに注意して

²² 同篇第三部「ゲルマント大公夫人邸の午後のパーティ」のための覚書として全く同一の文を「カイエ 57」(1913-16年)に見出すことができるものの、その正確な執筆時期は特定できていない。Voir PROUST, « Notes pour Le Temps retrouvé de Cahier 57 (p° 17 r°, 1913-16) », *Matinée chez la Princesse de Guermantes : cahiers du Temps retrouvé*, édition de H. Bonnet et B. Brun, Gallimard, 1982, p. 326.
²³ Voir RTP, III, 1529, la note 4 ; Antoine COMPAGNON, *Proust entre deux siècles*, Seuil, 1989, p. 251-252

²⁴ COMPAGNON, *ibid.*, p. 248-249. コンパニョンの論証が十分に説得的でないように思われるのは、ひとつには語源学の源泉が完全に解明されていないから、そしてシャルリュヌはともかくとして、アルベルチヌと語源学との関係が明かでないからである。この「ゴモラの女」は「倒錯者」であるかどうかさえはつきりしないわけだが、いずれにせよアルベルチヌが特筆すべき語源学的好奇心を発揮しているようには見えないうのだ。

²⁵ VENDRYES, *op.cit.*, p. 126.

²⁶ Émile BENVENISTE, *Le Vocabulaire des institutions indo-européennes*, Seuil, 2 vol., t. I, 1969, p. 10.

²⁷ *Ibid.*, p. 105-107.

²⁸ *Ibid.*, p. 12.

²⁹ 日本語版ではそれぞれ「本来の意味」「付与意味」と訳されている。パンヴェニスト『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』前田耕作監修、蔵持不三也他訳、全二巻、1986、第1巻、5-6および102頁を参照のこと。

³⁰ この問いは言語態研究の観点からいい直せば次のようになる——本当に「最初」の意味を見出すことは可能なのだろうか、それを見出すとすることによって「意味」は変容してしまうのではないかと。

おきたい。わたくしの考えでは「一般名詞の特殊化」とは要するに語源学的探究とは逆方向の運動のことである。語源を追求することが固有名詞の一般名詞への分解だとすれば、その逆は「特殊化」であろう。バンヴェニストは『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』の序文で「意味（作用）signification」と「指示（作用）désignation」とを峻別しなければ「意味」をめぐる混乱が招来されると説いている²⁶。例えば同書第一部第八章の論証において signification が語基 radical を、désignation がその派生語をそれぞれ指して用いられていること²⁷、そして序文で、signification を明かにするためにとりあえず désignation から出発する以外に術のない語もあつてそのような場合は「時間の次元が説明の次元になる」²⁸と述べられていることから、語の基層の意味が signification、そこから派生したものが désignation であると理解してよいだろう²⁹。ここでいわれている signification と désignation との明快な区別から類推して一般名詞と固有名詞の違いを考えることはできるだろうか。「固有名詞は一般名詞の特殊化だ」と記したとき、用語はともかくとしてヴァンドリエスがこうした「本来的／派生的」の二項対立を念頭に置いていたのはほぼ確実である。「本来的意味」と「付与意味」を取り違えることは、語源学において、あるべき因果関係を顛倒させてしまうことにはほかならないからだ。「制度語彙」とは異なるけれども、類推によれば固有名詞の「意味」の探究は、その名前から désignation を取り除いて signification を見出すことであり、「一般名詞の特殊化」とはしたがって、逆に基層の signification に désignation をつけ加えてゆくことだと見なすことができる。

問題は、その「特殊化」によって最初の signification は影響を受けるかということである。最初の「意味」は元の状態を保ったまま無傷で存続しうるのだろうか³⁰。バンヴェニストは「時間の次元 la dimension temporelle が説明の次元 une dimension explicative になる」という。それはつまり語義の展開を説明することがすなわち時間の遡行であるということだ。本論でブルーストにおける時間の問題を詳しく展開することはできないけれども、それでもブルーストの言語観をよりよく照らしてくれるのはおそらく、時間を言語あるいは言葉に組み込むような、つまり時間を捨象しないような言語論であるように思われる。ブルーストがコンプレの司祭に語らせる怪しげな語源——もっぱら「形態の比較」（「形式上その推論の根拠となっているのはインド＝ヨーロッパ語 deru-wo とギリシャ語 drūs『櫛の木』との比較である」³¹）に依拠する点でそれは語源学者に正当に批判される類いの「語源学」と断絶である——に、学問的には信頼の置けぬものであるにもかかわらずわれわれが目にするのはそうした理由による。

コンパニオンは先に言及した著作で、物語上の「司祭／教授」という二項対立に代わるものとして「視覚的形態の象徴学／語源学」のそれを提示している³²。小説中では分散された説話的な役割を異にしているにせよ作家の依拠した源泉が同じなのだから語源学をふたつに分ける必要はないというわけだ。二項のうち後者は、コレージュ・ド・フランス教授等を歴任した当時の固有名詞研究の第一人者ロンニョン³³によって批判されていた著作家たちの提供する「土地の名のうちに化石化した歴史的〔で局部的〕な逸話」に、前者はとりわけマール、ラスキン流のイコノグラフィならびに美学が体现する「石のうちでつねに生きている普遍的な象徴」³⁴にそれぞれ対応するとコンパニオンは主張している。この対立は第一章で参照したケマールのテーゼ（「司祭／語り手」）ともおおそ響き合っているわけだが、「化石化」しているはずの石が蠢き出して縁取りを越えてゆくという事態を十分に反映しているとはいえない。というよりむしろ、墓石が溶けることによってこの二項対立は廃棄されるのではないだろうか。

³¹ BENVENISTE, *op.cit.*, p. 105.

³² COMPAGNON, *op.cit.*, p. 232-234.

³³ Auguste LONGNON (1844-1911). おそらくはヴァンドリエスがその名に言及したこともあって、主著『フランスの地名——その起源・意味・変遷』（1920-29年）が『失われた時を求めて』の語源学の源泉のひとつとされたこともあるのだが、草稿研究はその説を否定している。いずれにせよこの固有名詞研究の権威は同著序文で次のように予めブルースト的な語源探究の非科学性を宣言しているわけで、その意味でも源泉とは考えにくい。「地名の意味の研究は、重篤であることも少なくない変形をそれら名前が何世紀にもわたって被ってきた可能性を考慮しめずただそれらの分解で満足することは〔一世紀半前とは異なつて〕もはやない[...]。真に科学的な唯一の方法は地名それぞれの古い形を、叶わぬ場合は古い文書が同名の別の土地を指し示す古い形を研究してそれを出発点とし、われわれの先祖が代々話してきた言葉の助けも借りながら名前の意味を確定することである」（*Les Noms de lieu de la France, leur origine, leur signification, leurs transformations*, publié par Paul Marichal et Léon Mirot, Champion, fascicule I, 1920, p. 4-5. Nous soulignons.）。

³⁴ COMPAGNON, *op.cit.*, p. 232-234.

³⁵ *Ibid.*, p. 252 et 255. 彼らの名前は植物すなわち「根を張るもの」の名に由来している。

³⁶ クルツィウスは語源学、とりわけ人名や地名の解釈がマタイ福音書や旧約聖書によって正当化されていたといっている（『ヨーロッパ文学とラテン中世』（ドイツ語原典 1948）、南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房、1971、「余論 XIV 思考形式としての語源」、724頁）。それは語源学がかつては「普遍的」な知だったということ在意

第四篇『ソドムとゴモラ』において、かつて語り手を魅了したコンブレの司祭による語源学を完膚無きまでに論駁するソルボンヌ教授ブリショの依拠する語源学ないし文献学が、ドイツの科学的言語学にユマニズムを対置するという意味でのフランス・ナショナリズムに由来するがゆえに、彼の周囲の学殖者の名前もすぐれてフランス的たように作られているという、それ自体有益なコンパニョンの指摘³⁵には蒙を啓かれるけれども、クルツィウスが述べるように語源学は、マタイ福音書や旧約聖書によって正当化された経緯もあって、ある時期までのヨーロッパにおいては「普遍的」な知たり続けたのであり³⁶、その意味で「視覚的形態の象徴学／語源学」という「共時的」二項対立には限界があるように思われるし、そもそも『失われた時を求めて』には「語源学」が「古い石に生命を取り戻させる」[G, II, 830]とはつきり書かれてもいるのだ。そのことをプールのテキストに沿って示してみたい。墓石とともにプールの「語源学」を担うステンドグラスが次章の主役である。

すでにその一部を引用してある1908年のルイ・ダルビュフェラ宛書簡には、後に『サント＝ブーヴに反論する』へと変容することになる「1908年の小説」の準備として当時取り組んでいた主題が列挙されており、そこには「墓石」や「貴族」とともに「ステンドグラス」という語を認めることができる。

ところで、家族写真というものはいつ見ても大変面白いものですが、あなたの御家族のアルバムがありませんか。ほんの数時間で結構ですから一冊（とくにゴワイオン嬢の写真が載っているもの）を貸していただけるとたいへん嬉しいのですが。あなたがこちらに来て写真の人物の名前を教えてくださいればなお一層よいかと思えます。それから、あなたの自宅には二本の線〔父系と母系の二系統〕で表される系図がありますか。[…]

というのも今は次のようなことに取り組んでいるからです。

貴族についての研究／パリが舞台の小説／サント＝ブーヴとフロベールについての研究／女性についての研究／男色についての研究（出版は難しいでしょうが）／ステンドグラスについての研究／墓石についての研究／小説についての研究³⁷

この手紙は草稿執筆時期の推定作業においても重要な資料であるが同時に、フレースが指摘しているように³⁸、プールの小説の構想の少なくとも一部を写真への参照に負っていること、そして写真が系譜と結びつけられていることを示すものとしても貴重な証言となっている³⁹。写真について本論で詳しく触れることはできないけれども、系譜とステンドグラスの関係がここで注目される。

第一章でわれわれは『サント＝ブーヴに反論する』中の「ゲルマンの僧院」の断章に言及し、それが『ゲルマンの方』に再利用されていること、ただしそっくりそのままではなく、例えば「僧院」はもはやひとつの譬喩としてしか出てこないなど、テキストにかなりの変形が施されていることを確認した。「ノルマンディーの紫陽花」と呼ばれる青年貴族たちの中世にまで遡る系譜、全ヨーロッパに展開する王族、貴族とのつながりが「ゲルマンの一族」へと再編成される過程で貴族のイメージが変容したわけである⁴⁰。石木は、「紫陽花」に喩えられる男女それぞれの小さな集団を

味する。「一方では詩作が修辞学の一部であり、他方では語源論が文法と修辞学の基本に属していたので、語源論はまた詩文に必須の『修飾』であり、この状態は後世もつづいた」（同書、725頁）。彼のいう「ラテン中世」世界においては、という留保が必要だがこの場合の「後世」とはメロヴィング・カロリング両王朝時代からユマニズムの時代、ルネサンス期を経て少なくともバロック期までを指すようである（同書、729頁）。

³⁷ Voir Lettre à Louis d'Albifera, le 5 ou 6 mai 1908, *Correspondance*, t. VIII, p. 112-113.

³⁸ Luc FRAISSE, *Proust au miroir de sa correspondance*, SEDES, 1996, p.136.

³⁹ 実生活において作家はまさに写真に「性別を換えての（贅噴すべき）類型の再受肉化 *ré incarnation*」を見る習慣があったようである。死の半年前の1922年5月に（体調がすぐれない等の理由で）「おそらくもう二度とあなたに会うことはないでしょう」とジャック・ブノワ＝メシヤン男爵に語りかけるプールは、だからあなたの写真を貸してくれないかと依頼する、母堂と似ているかどうかを確かめたいのだと（Lettre à Jacques Benoist-Méchin, le 17 mai 1922, *Correspondance*, t. XXI, p. 203）。この「母」がしかし、ブノワ＝メシヤン自身は会ったこともない義母に過ぎぬことを知るときわれわれはある種の衝撃を受けはしないだろうか、「お父様の愛された女性の類型の反映が、お母様を透してあなたの貌に定着しているのです」（*Ibid.*, p. 240）。プールにとっての「系譜」が、性差を越えるつながりや、とりわけ「本当」にはつながっていないもの同士の結びつきであることを示唆するエピソードである。

登場させるプランが1908年から09年にかけて並行して存在していたことをファロワ版『サント＝ブーヴに反論する』および「カルネ1」に基づいて指摘し、「結果的には、海辺でグループをなすのは若い娘たちの方となり、青年のグループをめぐる断片はほどなく解体して、大雑把に言えば、ゲルマント家の名が呼び起す歴史的、詩的イマージュの中に吸収されていくが、そこへ至るプロセスはそう単純ではない」としている。その「プロセス」を仔細に見てゆく余裕はないので結論を述べておけば、「青年貴族」へと変容する「ノルマンディの紫陽花」は、人物像の分解と再編成を経てモンタルジス（後のサン＝ルー）を産み出し、さらにゲルマント一族の属性の一部を構成することになる。その過程ですで見たとように「ゲルマントの僧院」がコンブレの教会へと鑄直されたわけである。

もつとも、「紫陽花」であるそれら貴族の名はこの断章でははっきりと名指されることがなく、すぐ前の段落に登場していることから「ゲルマント」のことを指しているとも、また別の一族のものともとれるのだが、ともあれその名前は「プロヴァンス」ないし「イタリア」のものであるにもかかわらず話者のうちに「ノルマンディ」を喚起する。

この一族がプロヴァンスから来てこの地に定着したことやその名がプロヴァンス風であることなどなんら問題にならない。オンフルールからヴァローニュにかけて、あるいはボン＝レヴェックからサン＝ヴァーストにかけて見ることのできるあの美しい薔薇色の紫陽花が、どこからか移植されたごく表面的な彩りにすぎなかったのに今ではこの地方を美しく飾ることによってその象徴となっているのと同じようにして彼はノルマン人になったのである。⁴¹

当時ブルーストが取り組んでいたという「ステンドグラスについての研究」の成果がこの一節に現れているというのは穿った見方だろうか。「プロヴァンス風」の名前をもちながら「ノルマン人」になったというアイデアが「系譜学」を、そして「表面的な彩り」がステンドグラスをそれぞれイメージさせるのは決して偶然ではないと思う。同じ「人の名」の断章に、ある高貴な一族の歴史を組み込んだステンドグラスが登場するからである。ここで特に注目すべきは、物語絵として一連のガラスに次々と展開される一族の歴史＝物語が「エッサイの樹」のステンドグラスを起点として始まっていることである。

エッサイの樹というのはもちろん聖書を出典とするモチーフだがこの樹が書物のままであったならおそらく作家の関心をそれほど惹くことはなかっただろう。草稿ゆえに文意がとらえにくいところもあるけれどもいづれにせよ、聖書にのみ依拠して次のようなイマージュが生まれるとは考えられないのだ。

貴族というものはただ単にわれわれを夢に誘う名前をもっているだけではない。少なくとも大部分の家系にとっては両親の名、祖父母の名、等々はそうした美しい名前に由来するのであり、したがって詩的でないどのような物質も、さまざまに彩られているにもかかわらず（不純な物質 *matière vile* はそこに付着しないので）透明な名前のこうした終わらない接ぎ木 *greffe constante de noms* に介在しないのである。接ぎ木されてゆく名によってわれわれはステンドグラスのエッサイの樹のように彩られた水晶の芽から芽へとずっと昔にまで遡ってゆくことができる。人物たちはわれわれの精神の中でまったく想像的なものである名前のような純粋さを帯びてゆく。左手には薔

⁴⁰ 石木前掲書、59頁。

⁴¹ « Noms de personnes », *Contre Sainte-Beuve*, op.cit., p. 275. コルブによって転写・編輯された「カルネ1」には、取り組んでいる作品の形式に対する逡巡（「小説か哲学か」）やネルヴァルの「シルヴィ」への参照と同じ頁に「私はそこで四人の／若い娘の貌を知る、ふたつの／鐘楼、高貴な系譜、／ノルマンディの紫陽花に」（PROUST, *Le Carnet de 1908*, édition de Philip Kolb, Gallimard, coll. « Cahiers Marcel Proust », nouvelle série, t. VIII, 1976, p. 61）と書き込まれている。

薇色のカーネーションがあり、その上に昇ると右に野薔薇、さらに樹に沿って昇ってゆくと左には百合がある。茎はまだ続く。右手にあるのは青いきんぼうげである。彼の父はフランスの薔薇であるモンモランシー家の嬢と結婚していたのだが、父の母の方は交配されたカーネーション、二重の薔薇であるモンモランシー＝リュクスアンブル家の出身であり、そのまた父は青いきんぼうげであるショワズール家の嬢と、次いで薔薇色のカーネーションであるシャロー家の嬢と結婚していたのである。⁴²

⁴² « Noms de personnes », *op.cit.*,
p. 279-280.

ブルーストの参照したマールの『フランス十三世紀の宗教美術』にエッサイの樹の図像に関する記述がある。イザヤの預言の該当箇所も引かれているので少し長くなるけれどもそれを含めて読んでみたい。

あらゆる預言の中で、藝術に靈感を与え続けてきたものは実をいうとたどひとつしかない。エッサイの子孫に関するイザヤの預言である。「エッサイの株から芽が出て苗木の頂に実を結ぶ。そしてその上に主の御霊、智慧と聡明の霊、助言の霊と才覚の霊、知と敬虔の霊が宿るだろう。そして主を畏敬する霊が主を満すだろう……。その時エッサイの芽は旗のようにすべての民の前に姿を顕わすだろう」[イザヤ書、11章1-3・10節]。

この一節の象徴するものについての聖ヒエロニムスの昔から変わらぬ解釈を知るにはどれでもよいからイザヤ書の解釈書を繙いてみればよい。「エッサイの族長は」と十二世紀の修道士エルヴェは書いている、「王家の出身であり、それゆえエッサイの苗木は王家の血統を表す。芽の方は聖母マリアを象徴し、同様に実はイエス＝キリストを象徴するのである」。

中世の藝術家はきわめて抽象的なモチーフに対しても尻込みしなかった。彼らはイザヤ書のテキストを質素でかつ見事なものに変える方法を模索した。大聖堂の中に、封建領主の館の暖炉の上に見られるのとよく似た系統樹を作り上げたのである。しかし雄渾さにおいてそれは元のものを遙かに凌駕している。イザヤ書の言葉をイエス＝キリストの系譜と結びつけて「[...] 藝術家たちは眠ったエッサイの腹から生え出た樹を描いたのだから。彼らは幹に沿って段状にユダヤ歴代の王を描いてゆき、その上に聖処女を、さらにその上にイエス＝キリストを置いた。[...] そこにあるのはまさしくキリストの紋章としての樹である。その紋章によって彼の高貴さが見た目にも明かとなったからだ。しかし作品の意味を完全なものにするために彼らはさらに、肉体上の祖先の傍らに精神上的の祖先を配した。サン＝ドニやシャルトル、サント＝シャベルのステンドグラスにはユダヤの王たちの幹を挟んだ反対側に、指を上方に向けてメシアの到来を告げる預言者たちの姿を見ることができ。テキストの詩を超えたとはいわぬまでも美術はそれと同じ地位に昇ったわけである。⁴³

⁴³ MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France : étude sur l'iconographie du moyen âge et sur ses sources d'inspiration* (1898), 9^e édition, Armand Colin, 1958, p. 166-167. Nous soulignons.

ふたつの断章を比べてみると、マールの記述のどこにブルーストが着想を得たのかよくわかる。彼のいわゆるユダヤの血統に関する厄介な事情はここでは問わぬとしても、純粋な意味で宗教心をもたなかったと伝えられる作家がキリスト信仰の隠喩として「エッサイの樹」の系譜を辿り直したとは考えにくい。彼が惹きつけられたのは、上方に伸びてゆく形象と開花のイメージ、そして、大聖堂を書物のごとく読もうとするマール⁴⁴が全く触れていないことによって却ってその美しさが強調されること

になるだろうガラスの色彩に違いない。重要なのは、それら素材を確かに利用してはいるもののブルーストが美術史家のいうところに従うなら元は世俗の権力者のものである系統樹をより荘厳に鍍直した大聖堂の藝術を、さらに換骨奪胎してふたたび貴族たち——とりあえず世俗の者とはいえる——の手に取り戻した点である。だがそれだけではない。さまざまに彩られた花や名前が誘う夢想だけでは、ブルーストの断章は結局のところ勉強熱心で美術史に通じもする作家の習作の域を超えるものではなかったろう。実際この断章は習作にとどまった、というか彼が企図したような形で世に出ることはついになかった。さらに別の要素が必要だったのである。

ケマールが指摘したようにエッサイの樹がジルベール・ル・モーヴェに端を発するゲルマンの「系譜」と世俗の栄光とに形を変えろとして、ゲルマンの館への話者一家の転居によってもたらされた貴族への幻滅（『ゲルマンの方』）は、語り手の恋慕の対象だったゲルマン公爵夫人邸の晩餐会で（いささか矛盾した言い方になるが）最高潮に達する。名前のそうした地位失墜はしかし、間髪を入れることなく別のものによってあがなわれることになる。「私の期待を裏切っているとゲルマン夫人が考えたこと」「すぐまた償いのために晩餐にいらしてくださいね、今度は系図ぬぎで」こそ逆に、終わり頃になって——というのも公爵と將軍はもはや系図の話をするのをやめようとはしなかったからだが——この晩餐会を完全な失望から救うことになったのである（[G II, 821]）。ゲルマン公爵（「語 mots ではなく名 noms の語源学者」[G II, 822]）は自分のまたは別の家の系譜についてとめどなく語り続け、語り手を魅了する。そこで繰り上げられる系譜に関しては詳細を省くけれども、特徴的なのは、自分もその中に含まれる系譜にとってなにがしかの意義を有すと判断できる人物の名が会話において言及されるたびにゲルマン公爵は「だってその人はオリアーヌのいとこなのでから Mais c'est un(e) cousin(e) d'Oriane」と口にするのである（[G II, 824]）。その宣言が、オリアーヌとまさにいとこであるゲルマン大公夫人に対して用いられることもある以上、絶対にとはいえないが大体において漠然と、つまり血筋であることは確かなのだが正確な親族関係を覚えていないときにも、あるいはそういうときにこそ用いられる点が重要である。シャルリュス男爵ほどでないにせよ比較的有職故実に通じており、少なくとも夫人よりはるかに系図に詳しい公爵にしてそうなのだから他の貴族の教養は推して知るべしといわねばならぬが、要するに正しい系譜などほとんど誰も覚えていないし、それで別段困ることもないのである。ブレイアード新版『ゲルマンの方』の注釈者の「ゲルマンの名はもはやこの名のうちに体现されたあらゆる存在、そしてこの名がかきたてた夢想に対する隠喩以外の何ものでもない」⁴⁵という素直な読解にはそれゆえ物足りなさを覚えずにはいられない。『失われた時を求めて』の貴族の名前は本当に「一本の途切れのない糸」⁴⁶によって結ばれているのだろうか、彼らが名を列ねる系譜は大聖堂の内にはなく、したがって二本の糸が最終的にイエスに収束してゆくようなものではもはやないというのに。

この時にはまだ「歴史に対する好奇心は審美的快感に比べて弱かった」と述懐する「私」は、パリ社交界最高位のサロンで耳にした数多くの貴族の名を頭の中でつなぎ合わせながら「この上なく優雅な効果をもち次々と色を変えてゆく枝々を想像する」[G II, 831] ことしか出来ないでいる。「枝々」、すなわち彼は貴族の名の系統樹をステンドグラスのエッサイの樹になぞらえるのである。

互いに親和性があるとは私には思いもよらなかった他の名前への引力・魅力によって移動するそれぞれの名前は、それらが私の頭の中で占めていた定位置、そこでは名前は習慣によってその輝きを曇らされていたのだがそうした位置

⁴⁴ マールは『十三世紀フランスの宗教美術』でユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』の一節を引きつつ「大聖堂とはそれぞれが一冊の書物なのである」と述べている。Ibid., p. 395.

⁴⁵ RIP, II, 1683.

⁴⁶ Ibid., p. 1682.

を離れてモルトマール家やスチュアート家、ブルボン家と合流しに行き、それら一族と共にこの上なく優美な姿を見せ色彩の絶えず変化する枝を曳いてゆく。ゲルマントの名さえ、その輝きを受け継ぐ者がいなかったがそれだけに一層烈しく燃え盛ったままであるすべての美しい名前——ゲルマントの名がそれらに結びつけられていたことだけは私も知っている——から、純粹に詩的な新しい再生因子を受け継いでいるのだ。少なくとも、高く伸びた幹から派生するあらゆる枝の先端ではそうした因子が賢王や高名な王女の姿へと変容するのが私にも見えた。等間隔に位置しそれぞれ異なった色をもつ[こうした名前は]ゲルマントの系譜から分岐し、エッサイの樹を描いた古いステンドグラスのイエスの祖先たちのようにガラスの樹の左右両側で咲き誇る透明で互い違いに萌え出た色とりどりの芽を、異質で光を透さぬ物質によって混濁させることはなかったのである。[G II, 831-832]

ここに引いた一節がマールによるエッサイの樹の描写を下敷きにしているのは明かであり、したがって1908年の『サント＝ブーヴに反論する』のための断章とも用語において、また透明なガラスのイメージや「高さ」の譬喩 (tige altière) においてある程度似通っているのは確かである。だがそれらはやはり同一ではない。語り手の夢想はどのような変形を被ったのか。マールのエッサイの樹および『サント＝ブーヴに反論する』のそれと比較してみなければならない。まずマールのものとブルーストのものとは、

- 「肉体上の系譜」と「精神上の系譜」(「二本の線」)とが交わることなくイエスを目指して昇ってゆく大聖堂の樹形図に対して、貴族の樹形図には「名前の接ぎ木」としての婚姻関係が導入されている、
- 後者にはイエスのような終着点がなく、(原理上)どこまでも伸びてゆくことができる「接ぎ木」もそれゆえあらゆる時に起こりうる、
- ガラスの物質性が捨象されず、光を透すというガラス本来の透明性と、「不純で卑しい物質」との対比が導入されている、

という三点が異なっている。さらに『サント＝ブーヴに反論する』のエッサイの樹と『失われた時を求めて』のそれとの比較は次のようなことをわれわれに教える。

- 『失われた時を求めて』ではもはや「モンモランシー＝リュクサンブール」式の名前が示唆されない、
- 『失われた時を求めて』には「世継ぎのない名前」と(したがって)「再生を促す因子 nouvelle détermination」とが登場する、
- 『サント＝ブーヴに反論する』の「卑しい物質」といういくぶん抽象的で譬喩的な表現に代わって『失われた時を求めて』では「異質で光を透さぬ物質(による混濁)」という、ガラスの物質性をことさらに強調するような表現が用いられている。

ブルーストは「ガラスの樹の左右両側で咲き誇る」といったいい方でマールの記述を喚起しつつも、それらを「肉体と精神」の系譜とは異なって互いに交叉しうるものへと変容させている。つまり彼はそこに婚姻を持ち込むことで系譜が原理的には永久に続いてゆくことを可能にした。それはイエスのような終着点を系譜から失わせることであり、そのことによって系譜は、終わりから振り返って過去の出来事に価値を与え

ることが可能である場合とは別の種類の時間性を与えられることになる。マールのいうように大聖堂の藝術が封建領主の館から来ているとすれば元々そこには、ちょうど作家がダルビュフェラに訊ねたのと同様の「ふたつの系統」があったと考えられる。その意味ではブルーストは単に樹形図を旧に復させたに過ぎぬようにも見える。だがおそらくそうではないだろう。「受け継ぐ者のない名前」の存在が言及されているからである。

貴族の系譜においては始まりも終わりもともに暫定的なものでしかない。連合 alliance つまり婚姻を表す「接ぎ木」は系譜上のあらゆるところで起こりうるが、来し方行く末がわからないとすれば「接ぎ木」でしかなかったものがいつ「幹」になっても決して不思議ではない⁴⁷。事実、頂点を極めた、つまりあらゆる高貴な血統がその終点であるおのれの下に流れ込むと錯覚したゲルマント家は、戦中戦後を通じて甚だしい凋落を経験することになる。すでに指摘したように、もはや一直線に引かれた血統 lignée はここには存在しない。幾多の有力貴族の名がゲルマントに暫定的に統合されるとしても、ゲルマントの名前自体がそもそも「断絶した美しい名前」から「新しい再生因子」を受け継いでいる以上、単一の系統などありえないのである。この「再生因子」が『サント＝ブーヴに反論する』の「接ぎ木」や「移植された飾り fard rapporté」の変奏であることはいうまでもない。ところで、すでに引いた論文でケマールは、ジルベルトを媒介として「ゲルマントの方」と「メゼグリーズの方」とが連結されると分析していた。『失われた時を求めて』決定稿に即していえばそれはジルベルトがゲルマント一族のサン＝ルー侯爵家に嫁ぐことを意味しているのだが、テクスト生成プロセスを考慮するならここで「連結符」⁴⁸となるのはジルベルトであると同時にゲルマント一族の祖ジルベール・ル・モーヴェでもあることになる。今では教会のステンドグラスに仰ぎ見られる一人の人物から出発したふたつの系譜が再び交叉するわけで、名前は同じだが物語の上でジルベール・ル・モーヴェの正しい子孫ではないジルベルト・スワン（但し結婚したのはジルベルト・ド・フォルシュヴィールとしてであるが）はゲルマント一族にとっては「接ぎ木」である。イエスの系図を貴族のそれに鋳直した必然的な結果であるこの「接ぎ木」とは何か。また「接ぎ木」と「卑しい物質」および「異質で光を透さぬ物質」とはいかなる関係にあるのだろうか。それを明らかにするために『サント＝ブーヴに反論する』からの変更について考えなければならない。

『失われた時を求めて』のエッセイの樹の元になったと考えられる下書きが、「ゲルマントの系譜」が1910年に集中的に書き込まれ、その後1916年まで断続的に加筆修正がなされた「カイエ 41・42・43」にある⁴⁹。一連の膨大な量の断章の中に「今日では分割不能なひとつの実体となっているリュイーヌならびにシュヴルーズ公爵、もしくはローアン＝シャボのような名前もかつては別々に生きていた」⁵⁰という一文を読むことができる。この二例が示すのは「別々に生きていた」ローアン家とシャボ家の、またリュイーヌとシュヴルーズ公爵という称号同士の結婚＝連合によって、「モンモランシー＝リュクサンブール」の如く「ローアン＝シャボ」や「リュイーヌならびにシュヴルーズ公爵」といった名前が作られたということだ。どちらか一方が「接ぎ木」と呼ばれることになるのだろうが、いずれにせよ連合の事実が失われぬ限りにおいて人はそれらの名前の出自を辿り直してふたつに分解することができる。それはその通りで、現実にはそうした名前は存在している。ではブルーストは何をいわんとしているのだろうか。この断片の正確な執筆時期は不明ではあるがいずれ1908年の「人の名」の認識が変奏されているだけなのだろうか。「カイエ 13」から引かれた次の断片（1909年のものと推定される）が、名前の「連合」についての作家の関心のありかを示唆し

⁴⁷『失われた時を求めて』第三篇『ゲルマントの方』第二部のゲルマント大公邸でゲルマント公爵夫妻が何故ゲルマント家のものだったブラバン公爵の称号がベルギー王家の所有（『纂奪』[G, II, 877]）するところとなったかについて議論する場面で次のようにいわれている。「それはブラバン家のひとりの男子と、チューリングゲンおよびヘッセンを領有していた最後の選帝侯の娘とが1241年に結婚したことによる、だからブラバン公爵位がヘッセン家に入ったというよりむしろヘッセン大公位がブラバン家に入ったというべきなのだ」[G, II, 879]。要するに大方の貴族にとってはどちらが幹でどちらが枝かはどうでもよいことなのである。

⁴⁸ QUÉMAR, *op.cit.*, p. 288, la note 2.

⁴⁹ Voir *RIP*, II, 1939. 恐らく「カイエ 41」のひとつの断片（p° 52 r°, *RIP*, II, 1255）が原型だろうが、「再生」に関するアイデアは直接的にはまだ現れていない。

⁵⁰ Ébauche du Cahier 42 (ff° 1 à 13 r°, 1910-1916), Esquisse XXXII, *RIP*, II, 1270.

ているように思われる。

古い回想録や書簡集がわれわれに教えるような種類の歴史は、われわれにとっては語源の科学、すなわち名前の化学分析 *la science étymologique ou l'analyse chimique des noms* の一部となっている。今日われわれにはひとつの完全な所与と見えるものが分解され、今日単純に思われるものが互いに異なる複数の事物から成っていること、そしてそれらがどのように組み合わせられているかをそれらは示す。[...] ひとつの名前の内側で部分が互いに結合する瞬間をわれわれは目にする。セヴィニエ夫人の書簡集にフォルバン氏 M. de Forbin とレ・ジサル家 les Issarts との婚姻のことが書かれてあるのを読んでわれわれは、現代のフォルバン・デ・ジサル Forbin des Issarts という名がどのようにして形成されたのかを知るわけである。⁵¹

ブレイアード版の註釈によれば、伝えられる婚姻は「シャルル＝ジアサント・ド・ガリアン、サレルヌならびにレ・ジサル侯爵 Charles-Hyacinthe de Galiens, marquis de Salerne et des Issarts」と「シャルロット＝ヨランド＝フェリシテ・ド・フォルバン、ガスパール＝パラメド・ド・フォルバンの嬢 Charlotte-Yolande-Félicité de Forbin, fille de Gaspard-Palamède de Forbin」との間で1731年に成ったものである⁵²。決定稿では「アグリジャント大公、その母がモデナ侯爵の孫ダマスであると私が耳にしたとたん [...] 不安定にしか結びついていない化学的な付随物から解き放たれ [...] はるかに魅惑的な結合体を構成する」[強調藤田、G, II, 831]といった文が見られるが、そうした「結合体 combinaison」がどのようにして成立するかを探究するのが「名前の化学分析」としての語源学というわけだ。「化学的な付随物」から「はるかに魅惑的な結合体」へと昇華させる一種の触媒としてだろう、ブルーストが語源学に何を期待していたかをよく伝えるパッセージである。

さてこの覚書では「結合」の具合はごく簡略化されているけれども、いわんとすることは明瞭である。「ゲルマンの僧院」のステンドグラスに即して展開してみると「青いきんぼうげ」は、モンモランシー＝リュクサンブール＝ショワズール家またはモンモランシー＝リュクサンブール＝シャロー家の嬢がX家の誰かと結婚して生まれた男性と、モンモランシー家の女性との間の子、すなわち（単純に結合させれば）X＝モンモランシー＝リュクサンブール＝ショワズール＝モンモランシー家またはX＝モンモランシー＝リュクサンブール＝シャロー＝モンモランシー家の何某だということになる。『失われた時を求めて』のゲルマン公爵夫人がその血統の尊さ（「混じり気なしの sans alliage」）を強調したいときには出自をより明確にした「オリアヌ・ド・ゲルマン＝ゲルマン」による署名も可能だったこと [TR, IV, 582] をここで思い出しておくのも無駄ではない。だが結局は『サント＝ブーヴに反論する』での「モンモランシー＝リュクサンブール」というアイデアが再利用されているだけのようにも見える。

では何故『サント＝ブーヴに反論する』の断章「人の名」は小説として生成することに失敗したのだろうか。『ヴルテンベルク大公、母はマリー・ド・フランスとして生まれ、そのまた母は両シチリア王国の出身である』とすれば、彼の母は要するにルイ＝フィリップとマリー＝アメリーの嬢でヴルテンベルク公爵と結婚したことになるのだろうか⁵³。エッサイの樹の隣のステンドグラス上で、樹形図を語り直したこの一文は、『サント＝ブーヴに反論する』の話者がそれをめぐって夢想を繰り広げるところの、いわば核となる系譜学的問いである。貴族の名前は、過去を振り返って

⁵¹ Ébauche du Cahier 13 (ff^{os} 8 et 9 v^o, 1909), Esquisse VII, *ibid.*, 1049-1050 ; cf. QUÉMAR, « Inventaires de contenu des Cahiers "Combray" : Cahier 13 », in *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 13, 1982, p. 63-67. Nous soulignons.

⁵² *RIP*, II, 1880. ただしこの結婚に実際に言及したのはセヴィニエ夫人ではない。

⁵³ « Noms de personnes », *Contre Sainte-Beuve*, *op.cit.*, p. 280. なお le duc de Wurtemberg は実在の人物でその結婚は1837年に行われている。『失われた時を求めて』では彼の名は想像上のステンドグラスではなく貴族たちの系図談義の中で言及される。Voir G, II, 825 et *RIP*, II, 1273-1274.

はそれを分解し、未来に臨んではそれを結合させてゆくというふたつの相反する運動の舞台となるわけだ。しかしこの問いだけでは決して『失われた時を求めて』は生まれなかった。原因はおそらくひとつではないだろう。だがそのうちの少なくともひとつはここで指摘しうる。すなわち、「モンモランシー＝リュクサンブール＝ショワズール＝モンモランシー」という名前のあり方が「失われた時」の探究のひとつの限界を示しているのである。

あるいはこういってもよい。「系譜学的問い」とはいうものの、ある意味で答えは初めから割れている。上の冗長な名前に含まれる「X」は任意のものでよい。名前の結合方式が定まっている限り論理的に、というか算術の問題としては敢えて設問の労をとるまでもない単純な事例に過ぎないからだ。他の要素が与えられれば人は「X」をいとも容易に導くことができるだろう。そうしたアイデアはしかし「カイエ 41-43」に集中的に書き込まれた「ゲルマンの系譜」においてもはっきりと認められる。「その子孫とは個人的に面識がないような場合でも名前の歴史だけは頭に入れていた」⁵⁴ ゲルマン氏のように有職故実に通じる人々は「こうした名前の美を想像力によって理解することをせずにその歴史だけを完璧に頭に入れているために、代数の精密な公式 la précision d'une formule algébrique のような明快さをもってあらゆる姻戚関係、わかりやすい事例や偉業の数々、自分たちが同列に就いている高い地位といったものを各々が自分だけのために要約していた」⁵⁵。つまり「モンモランシー＝リュクサンブール」という名前は「化学」というよりむしろ「代数」の次元のものなのである。先に引いた 1909 年の「カイエ 13」とこの草稿との時間差をどうとらえるかは難しいところで、時間の経過に伴う「化学」から「代数学」への発展と見るべきか、それとも別系統のアイデアが多少の時間的ずれを伴いながら並行していると解釈すべきだろうか。

ブルースト的な「名前の化学分析」とは、「カイエ 13」の記述を文字通りに受け取るならごく単純な規則に従う手法にすぎない。どこかの家系との間で姻戚関係が成立すれば、「接ぎ木」としてふたつの名前を接続すればよいだけだからだ。うってつけの連結符をフランス語は備えてもいる。『失われた時を求めて』において報告される多くの婚姻のひとつとして、ほとんど王族にも等しい地位を誇っていたゲルマン大公が破産から立ち直るために前デュラス公爵夫人と結婚することになるのをわれわれは知っているが（『見出された時』）しかし、その婚姻はもはやゲルマン＝デュラス大公といった称号を構成することはない。理由は単純で、ただ一度 [ZR, IV, 533] を除いて最後まで家名でのみ名指されてきた前デュラス公爵夫人、つまり元ヴェルデュラン夫人が貴族出身ではないからである。では系譜学は最新の「ゲルマン」（大公位）を「ゲルマン＝ヴェルデュラン」という不可能な名前へと遡及的に分解することができるだろうか。答えは否である。この「ゲルマン大公」という称号をロラン・バルトのいうように「展開 déplier」してみても「ヴェルデュラン」は決して見出しえない。その結婚のエピソードの下書きが作成されたのは 1918 年であるが⁵⁶、「カイエ 41-43」にもすでに貴族と平民との「不釣り合いな結婚 mésalliance」がはっきり語られている。他ならぬゲルマン家のそれである。

ゲルマン氏はまた貴族のふたつの名前の結合ではなく貴族の名と平民の名との結合——この話題の出された状況がそれを不釣り合いな結婚と呼ぶことを許さなかった——を思い起こさせることもあった。それはある日彼がルイ＝フィリップ時代の初め頃に著名だったある航海士の名を挙げた折りだったが、彼はこういったのである、「私の曾祖母はその航海士の嬢なのです。彼には二人の嬢がおり、どちらもたいへん美しく莫大な財産をもっていたので

⁵⁴ Ébauche du Cahier 42 (ff^{es} 1 à 13 r^o, 1910-1916), Esquisse XXXII, RTP, II, 1269.

⁵⁵ Ébauche du Cahier 41 (ff^{es} 63 v^o et 65 r^o, 1910-1916), Esquisse XXXII, *ibid.*, 1264. Nous soulignons.

⁵⁶ Ébauche du Cahier 74 (ff^{es} 119 à 121 r^o, 1918), Esquisse XLIX, RTP, VI, 923-924.

すが、一方は私の曾祖父と、いま一方はモンモランシー公爵と結婚したわけです。この場合、歴史の浅いブルジョワの名前がゲルマントの名前に導入したのは別の種類の因子で、[ゲルマント氏がその直系であるという意味で]緊密かつ明確であるためにそれはきわめて確かな輪郭とともにこの名前[ゲルマント]の歴史の一点に突然具現化された [...]。⁵⁷

⁵⁷ Ébauche du Cahier 42 (ff^{es} 1 à 13 r^o, 1910-1916), Esquisse XXXII, *RIP*, II, 1271. Nous soulignons.

『サント＝ブーヴに反論する』の「接ぎ木」から「原因となるもの *détermination*」へという語彙自体の変更もさることながら、やはり「ゲルマント」や「モンモランシー」へのブルジョワの系譜の「接ぎ木」は名前としては表されていないことに注意したい。最終的に「ゲルマント」を「モンモランシー」から区別する必要があるとしても、ブルジョワに対しては同じに扱って不都合はないだろう。「モンモランシー＝リュクスアンブル」という名前がわれわれには既に与えられているだけに、ブルジョワとの「不釣り合いな連合」が厳格な差別の対象となっているのは明白である。そのアイデアは最終的には放棄された、というか最終篇のヴェルデュラン夫人による「名前の篡奪」に統合されることになるわけだが、この段階ではゲルマントの行なった「不釣り合いな結合」は別の形でも語られていることから、実現の可能性はあったと十分に推測しうる。次に引くのはその変奏である。

私はそのブルジョワの名がふたつの種子へと分割されるのを見た、それぞれの種子のうちに若い女の姿が形づくられてゆくのを私の目は映し出す、彼女たちは未来の公爵夫人であり [...] 当時の舞踏会用の扇をもてあそび、その美と財産を目当てにする二人の列席者に言い寄られる、一方は今日ではブルジョワ階級との関係をひとつ残らず清算して浄化された *purifié* ゲルマントというこの王族の名前から出てきた者であり、彼がその美しい二人の遺産後継者に紹介すべく舞踏会に連れてきた、いつも行動を共にしているもう一方は、若いモンモランシー公爵だった。⁵⁸

⁵⁸ *Ibid.*, 1267. Nous soulignons.

「今日では浄化されている」という表現は「卑しい素材」による「接ぎ木」というアイデアと関連があるはずで、ブルジョワとの「結合」によって想像上のステンドグラスの系譜がその透明性を損なうことになるという構想があったのはほぼ確実である(系譜がここで種子から芽吹いた枝によって表されることにとも注意しておこう)。「ゲルマント」は以前にも「汚染」されたことがあるのだが「浄化」によってその痕跡を消し去り、そして再び「美と財産を目当てに」ブルジョワジーに接近する。おそらくそうやって「別の種類の因子」⁵⁹の導入が無際限に反復されてきたのだろう。もっとも、ほぼ同じ内容を語り直した同カイエの別の断片⁶⁰では「ゲルマントの名の浄化」という表現は姿を消していることから、ブルジョワ「因子」による「混濁」という語に対しては逡巡があったのだろうが、アイデア自体が放棄されたわけではない。いずれにせよ重要なのは「貴族＝ブルジョワ」という形式の名前が不可能だという点である。

⁵⁹ ここでは「別の種類の因子」の内容を限定的にしか扱っていない。

⁶⁰ *Ibid.*, 1272.

ところでブルーストは「ゲルマント」の名(それ自体は実在の名前である)を他の貴族の称号とは別格に扱っていた節がある。『フィガロ』に発表された「村の教会」に関して言及したマールへの書簡でブルーストは貴族の名前に対するマールの意見を尋ねる⁶¹。人が聞き違えて混同してしまうようなふたつの名前「フォルシュヴィル Forcheville」と「オルジュヴィヌ Orgevine」を考案したがどうだろうかというのである、「もしこうした名前がありえないということでしたら、また別のふたつの名前を使って、何となく類似して聞こえるようにすることもできると思います」。『フォルシュ

⁶¹ Lettre à Mâle, vers la mi-juin 1913, *Correspondance*, t. XVII, p. 552 et 553.

ヴィル」は『失われた時を求めて』に用いられることになるが実際にそうした聞き違いの場面は決定稿には採り入れられていない。肝腎なのは、ジルベルト・ド・フォルシュヴィルとロベール・ド・サン＝ルーとの婚姻は、ユダヤ系のスワン家に由来する財産のおかげで可能になったのであって「フォルシュヴィル侯爵」という称号自体の価値では断じてないということである。事実、その「連合」は「ゲルマント＝フォルシュヴィル」といった称号を作り出しはしなかった。それに対して「ゲルマント」の名の場合は、音声象徴や歴史的な意味づけを与えられようとしていたわけで、美術史家がどのような返答をしたのか明かではないし、そもそも「でたらめ」でよいというのもふざけた話だが、要するにブルーストが他の貴族の名と区別しようとしていたと見てよいのではないか。他の貴族と区別されるというのはこの場合、「ゲルマント＝ゲルマント」を唯一の例外として、「連合」を名前に反映させないことを指す。おそらく、「名前の化学分析」の一例として「フォルバン・デ・ジサル」に言及した1909年の時点では、ブルーストには「化学分析」と「代数学」との差異が見えていなかったのではないだろうか。いい換えれば、1910-16年の「カイエ 41・42・43」で展開される「ゲルマントの系譜」についての思考に「代数学」を導入することで、曖昧だった「化学分析」の意味や役割が明確になったということだ。ではその役割とはいかなるものだったのか。

「代数学」と役割を分け合うのだから、「化学分析」とは、連結符号のない単一の名前のうちに系譜を触知すること、そして実際に問題になるのがゲルマント大公とヴェルデュラン夫人との婚姻であってみれば、単一の名前のうちに貴族とブルジョワとの差異を触知することにほかならない。まさにそれを対象としたバルトの古典的なエッセイがある。「ブルーストと名前」というエッセイにおいて、ブルーストの名前の動機づけ motivation はふたつに分類される。ひとつ目の象徴的音声学 phonétique symbolique に基づくという「自然な動機づけ」⁶²には、それがフランスに限定されぬ事柄ゆえ今は触れずにおくけれども、第二の「文化的」動機づけが「フランス」だという指摘は今もその有効性を失ってはいないはずである。

ローム、アルジャンクール、ヴィルパリジ、コンブレ、ドンシエールが実在しようとしまいと、これら名前は「フランス語音としての本当らしき plausibilité francophonique」と呼ぶことのできるものを示す点で何ら変わるところがない（重要なのはその点である）、つまりそれらの真のシニフィエはフランス、あるいはより適切に言えば「フランス性 francité」なのである。[...] 固有名詞は「国籍やそれから連想しうるすべてのイメージ以外にも」もっと特殊なシニフィエに送り返すこともできるだろう。たとえばバルザックにおける（地域としてでは断じてなく環境としての）地方、あるいはブルーストにおける社会階級がそれで、ブルーストの場合は de で爵位を示すといういかにも姑息な手段を講じるのではなく、固有名詞の大がかりな体系を確立するのだが、具体的にはそれは一方で貴族と平民という対立、他方で無音の語末（いわば袈裟を長く引くようにして発音される語末）をもった長母音と唐突に終わる短母音との対立によって分節化されている。すなわち一方ではゲルマント、ローム、アグリジャントが、他方ではヴェルデュラン、モレル、ジュビアン、ルグランダン、サズラ、コタール、ブリショ等がパラダイムを形成しているわけである。⁶³

墓碑銘に関連して既に引いたこの書簡（4頁、註19）には、名前についての質問も含まれていた。というよりむしろ一番知りたいのは名前のことだと前置きしてブルーストは名前に対する美術史家の考えを問うている（*Lettre à Mlle, vers la mi-juin 1913, Correspondance*, t. XVII, p. 552 et 553）。「特にあなたにお尋ねしたいこと」、それはゲルマントという名の語源ですとブルーストはいう、この名前にどのような語源がありうるか御存じでしょうか、いえ「全くのでたらめでも構わないのです、それを語るのは語源学への偏執にとりつかれた一人の司祭ですから」。

⁶² Roland BARTHES, « Proust et les noms » (1967), dans *Œuvres complètes*, t. II, Seuil, 1994, p. 1373.

⁶³ *Ibid.*, p. 1374-1375.

「フランス」という記号内容が原理的に「社会階級」や「地方 province」（例えばバル

ザックの「Z・マルカス」を思い起こされたい)を含んでいるわけではない。それらは歴史的に「フランス」という記号と結びつけられそれを裏打ちしてきたにすぎない。バルトのいう「文化的動機づけ」とはそのことを意味している。さて問題なのは、別の範列に属しているはずのゲルマントとヴェルデュランとが、にもかかわらず小説の最後に結合してしまうという驚くべき事態である。現実の第三共和制下のフランスではすでに大ブルジョワの支配が確立しており、貴族階級はその資格においては周縁的な役割しか担っていなかったわけだが、そうした背景へ還元してしまうのではなく、名前、そして名前の連なりが形づくる系譜というものについていまいし考えてみなければならない。

上に引いた貴族の名のエッセイの樹からは「卑しい物質」や「異質で光を透さぬ物質 *matière étrangère et opaque*」が除外されていた、というかそれが除外される限りにおいて、ステンドグラスは「見目鮮やかな彩色にもかかわらず」透明度を保ち光を透す。「モンモランシー＝リュクスアンブル」式の名前のごとく結合および分離が随意に、つまり「代数学」的に出来るものなら話は簡単である。われわれは原理的にどこまでも歴史を遡ってゆくことができるし、かなりの蓋然性をもって起源の名前を復元することも可能であろう。また逆方向の運動において「接ぎ木」が何度繰り返されて名前が膨脹してゆこうとそれはひきょう程度の問題にすぎなくなる。ガラスが透明性を失わぬというのはそのことを指している。ところが「ゲルマント (=ヴェルデュラン)」という「接ぎ木」の場合は、「別の種類の因子」が導入されたのだとしても名前に顕れることはなく従ってそれが「接ぎ木」であること自体がそもそも隠されてしまう。不可能な名前たる所以である。その名前から系譜を過去に遡ってもヴェルデュランという名はついに見出されることがない。「一方における貴族と平民という対立、他方における長母音と短母音との対立」がこれらふたつの名の間に絶対的な懸隔を設けているはずだからである。社交界の事情を調べる際に最も信頼されているという「ゴータ年鑑 *L'Almanach de Gotha*」からもその痕跡は消されてしまっている [TR, IV, 533]⁶⁴。

貴族のエッセイの樹にとって「ヴェルデュラン」は「卑しい素材」以外の何ものでもない。ジルバルトの場合も事情はまったく同じである。「ゲルマント」がトレデュニオンを受け付けられないこと、他の名前がそこに「接ぎ木」される時、出自、すなわち「接ぎ木」であったという事実そのものが消え去るとはしかしどうということか。もちろん「接ぎ木」という出自が失われてしまうということは、ゲルマントという幹がヴェルデュランという「接ぎ木」からいささかも影響を受けなかったという意味に、あるいは両者が全き調和のうちに結合したという意味に解することも不可能ではない。完全に吸収・同化されてしまったのだから「ゲルマント」のうちに「ヴェルデュラン」を触知する必要などないというわけだ。しかし本当にそうか。「名前の化学分析」が「今日われわれにはひとつの完全な所与と見えるものが分解され、今日単純に思われるものが互いに異なる複数の事物から成っていること」を示す為のものだったことを思い出されたい。それが叫ばぬなら「失われた時」など永久に見出しえないのではないだろうか。ゲルマントがこれまで幾度となく繰り返してきたのだろう「(不釣り合いな)連合」とその痕跡の「浄化」の結果として、同じ名前が「波のように、絶えることなく」やってくる。その名前は「ひとつの完全な所与」なのだろうか。

ヴェルデュラン夫人がゲルマント大公と結婚したときコンプレのブルジョワたちは、それは偽のゲルマントだ、詐欺師だと口々に言い交わしたに違いない。私にとっては、変わることなくゲルマント大公夫人が存在しはするものの、かつて私にとってあれほどの魅力を湛えていた大公夫人、もはやこの世には

⁶⁴ この名鑑が一年ごとに更新されるとすればそれも当然のことなのだが、とはいえあらゆる者が欺かれるわけではなく、例えばコンプレの人々はヴェルデュラン夫人による名前の「篡奪」を噂の種にしていた(もっとも、自分たちの領主たる「ゲルマント」への崇敬をまだ失っていないらしい彼らにあっては、結婚の事実が揺るがないとすれば逆に相手こそ「偽の大公」なのだという風に事態が歪めて伝えられるのだが)。逆に「ゴータ年鑑」を信用したばかりにまんまと騙されてしまうのが他ならぬブロックである点に、名前の捏造に対する語り手のアイロニーを見るべきかもしれない。他ならぬというのは、ふたつの帝政を経たというのに旧友ブロックはこともあろうに「小辞 *de* で爵位を示すといういかにも姑息な手段を講じて」、その名前の「ユダヤ性」を消し去ろうと努めているからである。「ブロックは今は筆名だけでなく本名として『ジャック・デュ・ロジエ *Jacques du Rozier*』という名前を用いるようになっていて、彼がそこから決定的に解き放たれたと思われる『イスラエルの鎖』をその名の下に見出すには私の祖父のような鋭敏な嗅覚を必要としただろう」[TR, IV, 530]。ブルーストは五感の作家だと評されることがある。しかしその感覚がこうした用途をもっていることを忘れてはならない。

おらず、防ぐ術もなくその名前を奪われてしまう死者に等しいあの大公夫人とはその人物は何の関係もないという結果を生むことになった称号や名の同一性のうちには「…」何か痛ましいものがあつた。名前の継承というものは財産のあらゆる継承、あらゆる篡奪と同様に悲しいものだ。それでも中断することなくつねに、波のように新たなゲルマント大公夫人が到来する。いや到来するのはむしろ、千年にわたって時代毎に新たにこの称号を名乗る別の女性、すなわちただひとりのゲルマント大公夫人に受け継がれ、決して死に絶えることなく、変化することによって私たちの心を傷つけるすべてのものに無関心で、新たな波に呑まれた前の大公夫人が沈んでできた波紋を閉じて太古から変わることのない穏やかさを水面に取り戻させる名前そのものというべきかもしれない。[TR, IV, 533-534]

このような事態は「悲しむべき篡奪」だとひとまず語り手は率直に述べてみせる。確かにそれは一方から見れば許し難い「篡奪」である。だが別の見方をすればここで語られているのは、時代を超えて存在し続ける同じひとつの名前の無限の継承にほかならない。名前が波として到来する。これまで千年にわたってそうだったようにこれからの千年間も（もしゲルマント家が存続し続ければ）同一の名が波のようにわれわれのところによって来る。この途方もないイメージにおいて本当に悲しいのはあゝのゲルマント大公夫人がその「魅力」と不即不離のはずだった称号を奪われてしまうそのことよりむしろそれによって、「太古の昔から変わることのない穏やかさ」のうちに、ひとつの名前が「死に絶えることなく」つねに同じものと認識されるほかない事態なのではないだろうか。ゲルマント公爵夫人が「篡奪」の対象になるというアイデア⁶⁵もあつたことを勘案すれば『ゲルマントの方』の自筆清書カイエ（1916-1919年）において、ゲルマント公爵夫人について用いられる「集合的な名前 nom collectif」[G II, 821] という言い方が意味をもつ。「集合的な名前」という資格においては、大公夫人以上に語り手の思慕の対象だった「ゲルマント公爵夫人」に対してさえ「われわれの記憶や心はどこまでも忠実でいられるほど大きなものではない。現在の思考の中にわれわれはそれほど広い空間をもってはいないので、生者の隣に死者をとどめておくことはできない」からである。「生者」に場所を奪われるとき「死者」はどうなるか。現在の「ゲルマント（大公夫人）」が「ゲルマント＝ヴェルデュラン」であることを「名前の化学分析」によって明かにしえないのであれば「死者に等しいあの大公夫人と新しい大公夫人は何の関係もない」といつまでも断言できるものではない。条件法に置かれた「波」の述語が「カイエ 74」⁶⁶の複数形 *viendraient* から単数形 *viendrait* に変更されているのはそれをいわんがためだろう。

だが翻つて、「化学分析」によって明らかにされるであろう「ゲルマント＝ヴェルデュラン」という系譜を、ステンドグラスのエッセイの樹のごとくだ美しいイメージに仕立てればよいとブルーストが考えていたとも思えない。われわれの仰ぎ見るべきステンドグラスはすでに聖堂もろとも失われてしまったからである。「化学分析」の理論上は「ゲルマント＝ヴェルデュラン」なのだとしても、そのように「分解」して得られたものが「本来的意味 signification」であるかどうかはわからないとすれば、つまり原初の意味は変容してしまっておりわれわれがそこについに到達しえないとすれば結局は同じことだ。

「モンモランシー＝リュクサンブール＝ショワズール＝モンモランシー」という名前自体が系譜学的探究のひとつの限界を示していると述べた。それは第一に、無際限に伸びてゆく名前で作ることはできないからだ。そうしたやり方はあまりに不

⁶⁵ RTP, IV, 1451.

⁶⁶ Ébauche du Cahier 74 (ff^{es} 119 à 121 r^o, 1918), Esquisse XLIX, RTP, VI, 923-924.

経済である。バルトの分析が明快に示すように、語末の音だけによって貴族性を表すことが可能だとすれば、『失われた時を求めて』に登場するすべての貴族が「代数学」の仕組みに則った長ったらしい名をもっているわけではないこともまた諒解できる。オリアヌスが「ゲルマント＝ゲルマント」を実際には用いる必要がないのも、「レ・ローム大公 prince des Laumes」や「パルム大公 prince de Parme」がその短さないし単一性ゆえに「高貴さ」を損うことがないのも、貴族的な名とブルジョワ的なそれとの間に質的な差異が導入されているからに違いない。「文化的動機づけ」は詩と小説のエコノミーとを両立させる（さらにはフランス語のコードを逸脱しないようにする）ものなのである。この次元に話を限定すれば、「化学分析」を「代数学」と区別することができた時、つまり「代数学」の発見によって、それ以前に思いついた「化学分析」の意味を限定することができたとき初めて名前をめぐる小説が可能になったといえるだろう。もっとも、「代数学」が全く無用になったわけでもない。「代数学」しか学んでいない者もまた存在するのだから。新「大公夫人」は自分の名前に対して「化学分析」を行なうことはできない。彼女には自分の出自がわからないのである。

しかし今や「名前の化学分析」でさえそれだけでは十分といえないようである。「代数学」であれ「化学分析」であれ、「接ぎ木」たる名前をひとつひとつ取り去っていけば元の名前が無傷のまま得られるという具合に首尾良く事は運ばぬのではないだろうか。名前の探究が「失われた時」のそれと本質的に結びついているとすれば両者の間に共通する形式があると考えるのはさほど不自然ではないはずだ。おそらく、現代の藝術としてエッセイの樹を伸ばしてゆくというやり方の無効性がここで示されているのである。貴族の系譜は原理的にはどこまでも上昇してゆくことができることは既にいった。婚姻関係がそこに導入されたからである。できるというのはしかし単なる可能性の表現に過ぎず、実際、シャルリュスにもゲルマント公爵・大公にも子はなく、唯一サン＝ルー家が子をもうけて命脈を保つことができたらしいのもジルベルトという「接ぎ木」のおかげに他ならない。アルパジョン夫人とやらと自分の血縁関係を説明するのに三人とか五人とかいう数の祖母や曾祖母にまで遡らねばならないゲルマント公爵の話聞くうちに頭の中で組み上げられていったある観念を語り手は「藝術作品」になぞらえる。「私の記憶のあらゆる空間が少しづつ名前に覆われてゆき、それら名前は秩序づけられ相関的に組み合わせられ、互いに取り結ぶ関係を次第に増やしながら、完成された藝術作品を模倣していた」[G II, 826]。ここで作り上げられる系譜が藝術作品の「模倣」でしかない点に注意しなければならない。「完成された藝術作品」、それが例えばマールが記述するようなフランスの大聖堂であるとすれば、系譜を作ることは、それが正しいものであろうとなかろうとブルーストにとっては結局のところ藝術創造ではないということの意味するだろうからである。

ヴァントウイユの七重奏曲から語り手の「私」が受ける名高い啓示の中に「藝術家の祖国」[P, III, 761-762]についてのものがある。あらゆる藝術家はと、彼は感動に打ち震えながら考える、「未知で忘れられてしまったある祖国」から出てきた、その祖国は共有されない、なぜなら他の藝術家にもそれぞれ祖国があるからだ。「音楽家はこの失われた祖国を思い出すことなくしかしひとりひとりが無意識のうちにある種の斉唱によってそれとの調和を保っているのだ」[P, III, 761]。この部分の下書きは1910年にいくらか作成された後、1918年頃まで書き継がれたらしい⁶⁷。そうした草稿のひとつ「カルネ3」に「ヴァントウイユのために」という但し書きの付けられた覚書がある、「音、あれら美しい外国の女たち Les notes ces belles étrangères、われわれは彼女たちの言葉がどういふものか知らないしょく理解してはいない」⁶⁸という覚書がある。ヴァントウイユの七重奏曲（交響曲や四重奏曲とされた時期もあった）に関する

⁶⁷ RTP, III, 1143 et 1890.

⁶⁸ Ébauche du Carnet 3 (n° 4 v°, 1914-1918), Esquisse XIII, *ibid.*, 1144.

下書きはまず1910年に執筆された後、1914年から18年にかけて何種類かの草稿に展開したことがわかっている⁶⁹。この「音」は作曲家が具体的に用いる、したがって熟知している素材としてのあれら音をいっているのではないだろう。「よく理解してはいない」のはそれらが「祖国」、「忘れられてしまった祖国」に属しているからであり、「無意識」には「調和」を保っているにせよはやそれを「思い出さない」からにはかからない。音楽家、そして結局はあらゆる藝術家がすべきことはその「思い出すことのできない祖国」と、「ある種の斉唱」によって共鳴することである。

正しい系譜なるものはブルースト的藝術と相容れないものである。だがそもそも起源、すなわち「祖国」がわかっていなければ系譜など編むことはできないのだから、正しくない系譜もまた同様に藝術ではありえない。語り手はいうだろう、藝術とはもはや思い出すことも帰ることもない「祖国」との関係において作られるものなのだと。どこにあるとも知れぬ「祖国」とそれでもなお共鳴しようとする。それがブルーストの語源学・系譜学の役割なのではないだろうか。

本章で見たように、『失われた時を求めて』のステンドグラスの系統樹は婚姻、そして系譜の断絶という二点によってイエスを戴く系統樹とは全く異なるものである。婚姻によって（貴族の）系譜は可能性としてどこまでも伸びてゆくことができるが、同時にそこには後継者の不在の可能性が胚胎されることになった。大聖堂の藝術を世俗化した必然的な結果であり、どちらもエッセイの樹をめぐっては生じようのない問題だということは容易に理解されよう。確かにエッセイの樹は終着点をもつてはいる。だがその系譜はそもそもイエスだけを指して萌え出たものなのであって、その「終わり」を系譜の断絶と呼ぶことはできないのだ。次章ではそうしたことを別の観点から見直すことで結論を導くことにしたい。

3

語り手はゲルマント公爵から聞かされる貴族の系譜が藝術作品の模倣にすぎないと述べていた。ひとつにはその頃はまだ「歴史に対する好奇心は審美的快感に比べて弱かった」からということだろうが、ではなぜ「歴史」なのか。それは「歴史は、それが単に系譜学的なものであったとしても、古い石に生命を取り戻させる」[G II, 830]からであり、コンパニョンの提示する「イコノグラフィ／語源学」という対立が限界を劃されるのはまさにこの点においてである。ただしここで語り手の用いる「系譜学」は少しばかり註釈を要すだろう、というのも問題は、人の名が系譜から逸脱して「土地の名」になってしまうことだからだ。「かなり重要な役割を果たし、ゲルマント公爵やトレモイユ公爵と同等の高貴な生れであった人々が今日では子孫がいらないために忘却の淵に落ちてしまい、もはや耳にすることもない彼らの名は未知の名前の如く響くようになる。その下に人の名前を見出そうとは思ひもしない物の名前としてどこかの城館やどこか遠い村で辛うじて生き延びるに過ぎないのである。そう遠くない将来、ブルゴーニュの奥地で、教会を訪れようとちつぽけな小村シャルリュス村で足を止めた旅行者は、教会の墓石を詳しく調べてみるほど勉強熱心でなかったり時間が取れなかったりした場合、シャルリュスという名前がかつては最高位の貴族と肩を並べるほどだったことなど知ることがないだろう。[...] 私は考えを進めた、ゲルマントの名でさき将来においても土地の名以上のものと思われるかどうかかわかったものではない。偶然コンプレに足を止め、ジルベール・ル・モーヴェの描かれたステンドグラスの前でテオドールの後継者の案内を聞いたり司祭の著した案内書を読んだりするだ

⁶⁹ Ibid, 1143.

けの根気がある考古学者にとっては別だろうが」[G, II, 830-831]。「シャルリュス」や「ゲルマント」といった当代随一の称号が断絶して地名となる。それを押しとどめることは不可能である。だが「教会の墓石を詳しく調べんとする旅行者」や、「サン＝チレール教会の司祭の著した案内書を参照する考古学者」の努力によってその変化を記録することはできる（「考古学者」が記憶の「地層」や「鉱脈」と響き合う語である点に注意されたい）。その変化は系譜学的というよりむしろ語源的というべきである、この司祭は、かつて「私」に怪しげな語源を語って聞かせたことのある「語源学への偏執にとりつかれた」人物なのだから。「旅行者」が墓石を調べる。その時、「化石化」していたその墓は花開くように動き出すのである。

もちろん、「シャルリュス」の逸脱はその称号を戴くパラメード本人の生前からすでに始まっていた。小説の生成に即していうときわめて遅い時期に決定された⁷⁰この称号は「ゲルマント」のように名前にまつわる歴史的・語源的な逸話や色彩豊かな音声象徴⁷¹を与えられることなく、また少なくとも名前の「代数学」しか知らぬ人間にとっては「ゲルマント」とほとんど無関係とのみ理解されるようなものだった。男爵自身にとって王家の出自をより雄弁に語ってくれるはずの「シャルリュス」は、その自負にもかかわらず、ヴァイオリニストのモデル目当てに身を窶して通いつめるヴェルデュラン夫人のサロンで「シャルリュス男爵はゲルマント公爵が自分の兄だといっていたがそれは山師の嘘だろう」などと思われることにしか役立たない[SG, III, 432]。シャルリュスがゲルマント家にあつてほとんど独り正しい系譜なるものに固執してきたひとつの理由がわかるエピソードだがともあれ、自らの存在を委ねてきた系譜が断絶する可能性を他ならぬシャルリュス本人が拓くことになるのは読まれる通りである。きわめて矛盾したことであるけれども、称号も爵位もかなり遅い時期まで決まらなかった一方で「おば tante」であることだけは予め定められていた⁷²シャルリュスはその性的な嗜好——「倒錯」と呼ばれる——によって自らの系譜を危険にさらすことになる。そこからは子孫が生じないからである⁷³。ゲルマントの他の称号にしても「不純な接ぎ木」によって辛うじて命脈を保つにすぎず、それゆえステンドグラスの藝術ならびに大聖堂の藝術がともに作家によって相対化化されていることがわかる。「再生因子」を導入してみたところでそれが「異質で光を透さぬ物質」であつてみればステンドグラスはもはや機能することができなくなるからである。

大聖堂があらゆるキリスト教思想を結晶化させることによって美となるとすれば、ブルーストにとって墓石とは逆に柔らかなるものである。ところで、墓に刻まれていたはずの銘文はついに明かされることがない。フランスの歴史そのものである教会が墓石にその役割を譲るのだとすれば、そこにあるはずの名も当然フランスそのものであるような名前でなければならない。パラメード・ド・シャルリュスと仮に想像してみると、彼なら自分の名が石の上にあることを要求しただろうし、またいつの日か地名となって墓碑上で確認されるといわれてもいるのだから⁷⁴、ありえぬことでもない。むしろ、物語の登場人物としてのシャルリュス氏は、墓石が蜂蜜となって流れることなど知り知らぬだろう。だが正しい名前、正しい系譜に固執する限り、己の存在の根拠といつてもよいコンプレの教会の墓所に彼が自らの名前を要求するのは避けがたいことである。にもかかわらず小説としてはそこに名前が与えられなかった。その点が肝腎である。

1908年から1909年にかけて書かれた草稿の中に、大文字で始められた「歴史 l'Histoire」と藝術との関係の素描がある。われわれが第一章で取り上げた墓石の断章に直接つながっているこの一節は、歴史というものについてのブルーストの考えの一端をよく示していると思われる（後半は既に引用してある）。

⁷⁰ 1912年の段階ではまだギュルシー／ゲルシー／フルーリュス等のヴァリエーションとの間で揺れ動いていた。

⁷¹ 上例えばこの名前は「コンプレ」の章では「オレンジ色の光」を放つとされている[Sw, I, 169]。

⁷² 元々あった同性愛の主題がとくにシャルリュスにおけるような男色としても展開したのは1908年にドイツで起こったオイレンプルク事件（軍の指導層の間での同性愛の発覚とその余波）の影響が大きいとされるが、ともあれシャルリュスがまだゲルシー（ギュルシー）という名だった「カルネ」(p. 2v, *Le Camet de 1908, op.cit.*, p. 48-49)での男色についての覚書が「ソドムとゴモラ」のバルザック談義[SG, III, 437 et sqq])を中心に採り入れられていることから彼が「おかま」として構想されていたことはほぼ間違いない。

⁷³ このアイデアは山田宏昭氏の示唆によるものである。

⁷⁴ 「そう遠くない将来、ブルゴーニュの奥地で、教会を訪れようとして小村シャルリュス村で足を止めた旅行者は、教会の墓石を詳しく調べてみるほど勉強熱心でなかったり時間が取れなかったりした場合、シャルリュスという名前がかつては最高位の貴族と肩を並べるほどだったことなど知る由もないだろう」[G, II, 830-831]。

いつの日か詩神^{ミューズ}は見出されるだろう。いつの日か、ミューズなどには絶えてお目にかかったことのないような場所にこそ彼女は、終わろうとしている運命を迎えにやって来る。最後には、ミューズなど見えない振りを幾度となくしてきたその場所でいつの日か彼女に出会うのだ。それが歴史である。やがて、古い大聖堂にある美、その穹窿に表現された永遠の思想、ステンドグラスの彫刻、そういったものだけでは十分でなくなる。われわれが望むのは個々人、死者、そして彼らの生がほとんど非物質化され尽くしてなお残っているものなのである。われわれはだから視線を落として敷き詰められたこれら墓石を、墓石に覆われた人間的な、思考する、ほとんど実体のない、われわれの教会の舗石となっている人間の灰を見る。時がそれら墓石を溶かしてしまい [...]。⁷⁵

ミューズが「いつの日か」、「思いも寄らぬ場所に」やって来ること、それが l'Histoire なのだという認識は、叙事詩を始めるにあたってムーサを喚び出し加護を祈願するかつての詩人たちの身ぶりを思い出させぬでもない。だが、「いつの日か、ミューズなど見えない振りをしてきた場所で」出会うというのだから、詩の神をそのものとして待望しているわけではおそらくなかろう。あるいは、そういうものとして待ち望まれているのだとしても、「終わろうとしている運命」という語句が示唆するようにブルストにとって「歴史」は死と切り離せないものなのであり（「それゆえわれわれは足下の墓石を見る」）、だからこそ加護の祈りは墓石という、とりあえず終わりを劃すのは疑いないものとともに捧げられるのである。そしてその墓には名前がない。シャルリュスに子孫がいないからということもある。だが、墓石の一節は何かが生まれることを祝福するかのような調子をもってはいなかったか。詩神はもはや選ばれた者のところにやってくるのではないだろう、「教会の墓石を詳しく調べてみるほど勉強熱心でなかったり時間が取れなかったり」することもあるといわれているのだから [G II, 830]。詩神の到来によって作品が生まれ墓石が溶けるのではないのだ。そうではなく、溶け出してしまってもはや誰のものかわからぬ墓（の蹟）を、ほとんど「旅行者」の如き詩神が訪れるのである。彼女が「旅行者」という形象を与えられたのはおそらく 1910-16 年の間だが、幸運にも時間があつた場合、その「旅行者」は墓石を調べる。名前がない以上その人はこう結論づけざるをえない、ここにあつたはずの名は「篡奪」されたのだと。誰によってか。それはこの「旅行者」が「ミューズ」であつたことを勘案すれば明かだろう。墓碑銘だつた名前は展べ開かれ藝術作品が出来あがつたのである。その展開が正しい系譜を作り出すとはとても思えない、起源にあつたはずの名前がわからないのだから。

たとえば語り手にとって「貴重な地層」のひとつだつたシャルリュスの肉体はその「脈脈」を（おそらくは「考古学者」によって）採掘され尽くしてしまい、その身体はもはや血統など問題にならぬ全く別の系譜へと、つまり印刷稿で読まれるように死者たちの名へと展開されてしまうのである。

男爵はその時 [...] より力強く、荒れた天候の日に満ちてくる潮がよじれた小さな波 *vagues* を打ち寄せるように言葉をぶつけてきた。[...] おそらくは記憶力を失っていないことを披露するためであろうが私に過去のことを語り続けながら、陰鬱な [甲いひ] 調子で過去を喚起するのだが、そこには悲しみの念はなかった。彼が一族や社交界で死去した人々をどこまでも列挙して

⁷⁵ Ébauche du Cahier 2 (ff^{es} 19 r^o à 18 v^o, 1908-1909), Esquisse XXIII, RTP, I, 729.

ゆくのは、彼らがもはやこの世に存在しないという悲しみからというよりは彼らより長く生きたという満足からであるように見えた。[...] ほとんど勝ち誇ったかのような非情さをもって彼は、軽くどもりながら墓場を思わせるくぐもった響きで繰り返した、「アニバル・ド・プレオーテ、死んだ！ アントワヌ・ド・ムーシー、死んだ！ シャルル・スワン、死んだ！ アダルベール・ド・モンモランシー、死んだ！ ボゾン・ド・タレーラン、死んだ！ ソステヌ・ド・ドゥードーヴィル、死んだ！」と。この「死んだ」という語は、発せられる度に、それら死者たちを浮かび上がってこぬように墓穴のより奥深くに押しつけようとする墓堀人が量をそのつど増してゆきながら投げ込むシャベルの土のように死者たちの上に落ちていった。[TR, IV, 440-441]⁷⁶

死者の名から成るこの連祷は単に生き延びた者の勝利宣言とのみ解されてはならない。老醜や「冶金学的変容」に無益な抵抗を行ないながらシャルリュスは、「あらゆる社会的序列を逆転させる」[TR, IV, 439] こと、つまり自分の名の根拠であった系譜的正統性を自らの手で混乱させることによってその名を失い⁷⁷、代わりに他者の名前の奇怪な系列を呼び寄せる。彼の発する死者の名前がまたしても「波」に喩えられている点に注意しよう。同じように次々にやってくる「ゲルマント大公夫人」という「波」が要するに「決して死に絶えることのない」ひとつの名の生の描写であったとすれば、つまり「死者」は次々と「生者」に場所を譲ってゆくというプロセスの記述であったとすれば、シャルリュスの連祷は逆にそれぞれの「死者」の「墓穴」という場所を確保しようとするものである。墓碑は立てられるのだろうか。少なくともいえるのは、「ゲルマント大公夫人」という名前が、瞬間的に波紋が生じた後は何事もなかったかのように穏やかさを取り戻すその同じ水面に再び「波」としてやって来るのとは違い、それぞれの死者は場所を奪われることはないだろうということである。

ところで、語り手にとつての「失われた時」は作家にとっておそらくフランス語にあたる。詳述する余裕がないけれども、シャルリュスの洗礼名に関して次のようにいわれる通り、「語源学」的観点からすれば、フランス語の歴史が作家の探究のフィールドなのである。

サン＝ルーが待っているその叔父という人物はパラメードという名前なのだが、それは先祖であるシチリアの王族から受け継いだものだった。後になって、読んでいた歴史書の中に、その一族が絶やすことなく所有しヴァチカンの教皇庁から私の友人の叔父にまで子々孫々受け継がれてきたその名を見つけたとき [...] 私は [...] 古い名（それは、昔の地図や俯瞰図、あるいは看板や慣例集のように故事の記録をいわば絵画として語る町や村の名前でありまた、後には文法という厳格な法規となる改竄をラテン語やサクソン語の単語に私たちの祖先が恒久的に施すのに手を貸した言語の欠陥や土着の野卑な抑揚、間違った発音がフランス語の美しい語尾のうちに響くのを聞き取るこゝとができるような洗礼名）を探し求める、つまり古い名前の響きのコレクションによって、昔の音楽をその時代の楽器で演奏するためにヴィオラ・ダ・ガンバやヴィオラ・ダモーレを手に入れるのと同じやり方で、自分だけのために演奏会を開く人々だけが享受しうるような喜びを感じた。[JF, II, 108]⁷⁸

大雑把にこの部分も含むと考えられる下書き（1909-11年の「カイエ28」、この時点

⁷⁶ この連祷は直接的にはシャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』の一節より形式を借りている (François-René CHATEAUBRIAND, *Mémoires d'Outre-tombe* (1848), 2 vol., Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1951, t. II, Livre 40^e (du 7 au 10 septembre 1833), p. 767. プレイアード新版の註による。 Voir *KIP*, IV, 1254.). 亡命を余儀なくされたこの王党派貴族の手になる原典は悲痛なものである。「君主たちよ！ 王子たちよ！ 大臣たちよ！ 貴君の大使、貴君の同僚がここに戻ったというのに、貴君らは何処にいるのだ、応えてくれ。／ロシア皇帝アレクサンドルは？——逝去されました。／オーストリア皇帝フランソワ二世は？——逝去されました。／フランス王ルイ十八世は？——逝去されました [...]」。だが、皇帝に始まり、王、公爵、教皇、大臣と続いてゆくこの死亡者名簿の構成は、劇的な脚色という以上に系譜的正統性に従うものである。

⁷⁷ 系譜などには関心をもたぬジュビアンやモレルに彼が自らの高貴な出自を語ってきかせ「貴族階級に関する驕慢な教育」を授ける場面が思い出される [SG, III, 14, 399-400, 475-476]。一般の藝術家であるとしても出自は職人の息子でしかないモレルに、自分の自由になる称号を名乗らせようとする奮奮ぶりには、結局失敗はするものの、シャルリュスが「血筋」と「精神」というふたつの系譜を合致させ接近させようとしていたことが読みとれる、あたかも大聖堂のエッセイの樹を貴族の系図に置き換えんとする作家のように。それが失敗に終わったことがこうした顛倒に彼を向かわせたと考えられるだろう。

⁷⁸ この場合も同一の名の継承であるが、称号や家名と洗礼名とは恐らく役割が異なるのである。

ではシャルリュスはゲルシー侯爵、サン＝ルーはモンタルジスとそれぞれ呼ばれている)にはまだ見あたらないことから、この名前の系譜学はそれ以降の創作であることがわかる。もっとも、実在するこの洗礼名が他ならぬ「化学分析としての語源の科学」についての説明に関連していたことは念頭に置かれる必要がある。だがそれにしてもフランス語の「美しさ」が何か贖いがたい罪であるかのように話者に語らせるこの小説家、しかも外国語の実践を不得手としたブルーストにとってフランス語とはどのような言語だったのか。「フランス語を擁護する唯一の方法は」と1908年のある手紙でブルーストは書いている、「それを攻撃 *attaquer* することです。本当にそうなのですよ！

なぜならフランス語の統一性は相反し拮抗しあうもの、一見停滞しているようでありながら目の眩むような永遠の生を隠しもっているものによってしか作られないからです」⁷⁹。「言語の欠陥や土着の野卑な抑揚、間違った発音がフランス語の美しい語尾のうちに響くのを聞き取る」とは、この手紙にいう「擁護」と等価であるような「攻撃」を意味するのだろうか。語彙や発想が近いのは確かである。

外国語を不得手としたブルーストが、正式に学ぶことのなかった英文(ラスキンのふたつの著作)を訳そうと思い立ち、そしてその作業が実際には母(1904年刊行の『アミアンの聖書』)とイギリス人マリー・ノードリンガー(『アミアンの聖書』および1906年刊行の『胡麻と百合』)の用意した「逐語訳」をフランス語として整え註釈を施すことだった点に、彼の翻訳行為に対する当時の態度がほの見えないだろうか。ブルーストは後者の翻訳の際、ノードリンガーに「あなたが英語を翻訳すると英語の原初の特徴 *la nature primitive* が[フランス語のうちに]再び顔を見せるようです」と書き送っている⁸⁰。ブルーストが行なったのは、英語をフランス語に移し替えるというよりはむしろ、英語を内に孕んだある言語をフランス語に直すことだったというべきである。外国語を矯めること。外国語を矯正して母国語を作り出すこと。それはフランス語の歴史を振り返るときに必ず付随する行為ではないだろうか。わたくしはきわめて単純なことを述べているに過ぎない。フランス語の歴史を遡ってある語がいつからフランス語になったのかを測定するということは必然的に、それを超えればもはやフランス語ではなくなってしまうような地点を見出すあるいは作り出すことである⁸¹。その臨界点で起こっていること、それが外国語を矯めることに他ならない。その地点から「フランス語を擁護するとはそれを攻撃することだ」との認識に至る1908年の間にはほとんど絶対的な隔たりが認められる。その断絶がどこにあるのかを同定する余裕はないし、またそれが藝術や時間についての作家の認識の深まりと同期しているかどうかを詳述することもできない。ただ、パラメードという名前に見出されるフランス語のそうした矯正作用はすでに、ラスキンに対して働いた作用が相対化されたものでしかないとは指摘できると思う。それはいい換えれば、フランス語の使い手として作家が己の出自を問い始めたということに他ならない。

そして、フランス語というものに対するそのような認識は、特権的な名前をもたぬ者に対しても発揮される。彼らにおいてはその言葉遣いのうちに矯正作用が見出されるのである。

私たちが正確に発音することを非常な誇りとしているフランス語の単語は、ラテン語やサクソン語を歪めて発音するガリア人の口吻が作り上げた「誤れる連音」そのものである。私たちの言葉は他の言語をいい加減に発音したものにすぎない。今まさに活動中である言語の精髓、フランス語の未来と過去、フランソワーズの言葉の間違いに私の興味を引くものがあつたとすればそれはまさにそうしたもののなのだった。[SG, III, 134]

⁷⁹ Lettre à Madame Straus, le 6 novembre 1908, *Correspondance*, t. VIII, p. 277.

⁸⁰ Lettre à Marie Nordlinger, avril 1904, *Correspondance*, t. IV, p. 111.

⁸¹ 現存する最古のフランス語文献は842年の『ストラスブールの誓約 *Serments de Strasbourg*』である。

「誤れる連音 *cuir*s」の典型は、存在しないはずの例えば複数形を表す *s* を語と語の間に介在させてしまうようなものであるが、そうした「誤り」はほとんど身体的な反射運動であり、したがってそこにおいて人は「誤れる連音」つまりは言語そのものと化する。それゆえ実質的にはシャルリュスにおける固有名詞「パラメード」と同じものがここで問題になっていると見て構わない。かつてあれほど純粋で古典的なフランス語を話していたフランソワーズの言葉遣いはその嬢の影響によって墮落し始める [P, III, 660]。だがフランソワーズがその名のごとくフランス語そのものであるということは、遠い昔にラテン語を歪めてフランス語が作られたのと同様に今度はフランス語の方が歪められることをもまた彼女は引き受けねばならないということであり、それは結局、わざと「正式」な術語でない「つなぎ間違い *cuir*s」という語を使うことで言語的な階級の存在を示唆し差別を企てながらも語り手がそうした変化を肯定せざるをえないということなのである。

われわれはヴァンドリエスの論攷から出発した。固有名詞の意味を問うことはそれを一般名詞に還元することである。「固有名詞が一般名詞の特殊化したものである」というヴァンドリエスが一般名詞から固有名詞へ、あるいはむしろ「本源的意味」から「派生的意味」（固有名詞はその一部に過ぎない）という還元された見取図に依拠しているのに対しブルーストは、その語源学談義に明かなようにあくまで固有名詞を透して一般名詞ないしそれを含むフランス語の歴史を遡ってゆこうとしているのである。フランス語の歴史を生きる『失われた時を求めて』の登場人物のうちに、この言語の「来るべき」状態の胎動が予言されている、あるいは言語が不断に変化するものであるとすれば「今現に活動中」の変化が記録されているということだ。ブルースト的語源探究に対してヴァンドリエスが「語源学は予言的なものではない」⁸²と警告を発したのも決して故なきことではない。ブルーストが多数報告する民間語源学もまた言語実践からある種の法則を抽出し、そして大変なことに、新たな言語——「人々 *gens*」の複数形「人々たち *genss*」を発明するフランソワーズはまたドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム二世のフランス語名「ギヨーム *Guillaume*」からその妃の名「ギョームセス *Guillaumesse*」[JR, IV, 425]を類推する——を創出してしまふからである。

⁸² VENDRYES, *op.cit.*, p. 127.

登場人物たちのセクシュアリティについて論を展開する余裕はないけれども、キリスト信仰をもたぬブルーストがにもかかわらず聖母マリアにまつわる奇蹟への関心を終始失わなかったこととそれは何らかの関係にあるのではないだろうか。『スワン家の方へ』刊行に先立つ抜萃として『フィガロ』紙（1912年3月21日付）に掲載された「白の山査子、薔薇色の山査子 *Épines blanches, épines roses*」を読んだモンテスキウ伯爵からの書簡に対する返答の中でブルーストは次のように述べている。

あなたの仰った連袴と精液との混合に関して申しますと、私の知る限りその最も甘美な表現は、今ではいくらか古びてしまいましたがそれでも人を陶然とさせる、確かタイトルは「無言歌」とかいふフォーレのピアノ作品の中にあります。男色家の司祭が侍者の少年を犯しながら歌う曲があるとすればあれこそがそうではないかと思えます。⁸³

フォーレを好んだモンテスキウが自作の詩の作曲を「三つの無言歌」の作者に所望していた事情を差し引いても謎は減じられない。なぜ聖歌隊員でなければならないのか、そもそもなぜ同性愛なのか、そしてこの男色家は一体どうして「無言の物語」を歌わ

⁸³ Lettre à Robert de Montesquiou, le 25 ou 26 mars 1912, *Correspondance*, t. XI, p. 79. 言及されるフォーレの作品は『三つの無言歌 *Trois romances sans paroles*』（op. 17, 1863）である。

ねばならないのだろうか。キリスト信仰が形成してきた巨大な文化（それもまた接ぎ木にほかならぬが）のうちに何か性的なものを触知する文化史家の姿をブルーストに認めるべきなのだろうか。ブルーストと宗教の関わりを探るとすればそれは、聖母信仰において以外にはないだろう。マールによれば、カトリック特有の聖母信仰の表現、つまりマリアがイエスを胸に抱く形で樹の一番上に昇るイメージは十三世紀の末頃から始まったとのことである⁸⁴。イエスとその「肉体上および精神上の祖先」との間にマリアが割り込んだ形だが、マリアとイエスとの間は果たしてどうなっているのか。またそれは、『サント＝ブーヴに反論する』がついに未完に終わったことと何らかの関係があるのだろうか。

信仰をもたなかったブルーストはしかしカトリシズムの儀式には惹かれていたようである。書簡から作家のさまざまな考えや関心の在処（の少なくとも一面）に照明を宛てようとするフレースの『書簡に映し出されたブルースト』によると、彼はとりわけ「聖体 présence réelle」や「聖体の秘蹟 eucharistie」、「実体変化 transsubstantiation」に惹かれていたという⁸⁵。聖体のパンや葡萄酒がキリストへと「実体変化」を起こすのは原罪を免れたマリアによる「処女懐胎 Immaculé Conception」のおかげであるから当然この奇蹟への関心も作家は忘れていない。復活のそれとは別のこうした奇蹟への言及は時期的な偏りなく書簡に認める。フレースによる示唆のうちで特に興味深いと思われるのは、マリア信仰が教会での礼拝において取る連祷という形式への嗜好がブルーストの場合、文学作品に対しても適用されていたというものである。『見出された時』のシャルリュスが体現したごとく、晩年までその傾向は（主たるものかどうかはともかくとして）続いたようだ。

聖体の変化や処女懐胎がブルーストにおける藝術創造のメカニズムをよく表しているというフレースの指摘を導きの糸にしてみると、疑問はしかしある程度解決しそうである。たとえば聖歌隊の少年に対する男色は処女懐胎の変形されたものだろう。性行為なしの出産（産出）が、出産なしの性行為へと変化させられたわけである。貴族の系譜に即していうと男色は（そしていわゆる同性愛一般も）エッサイの樹の成長を止めるものに過ぎず、実際、シャルリュスとジュピアンとの行為は「子ができる心配のない」（かゆえの）快楽の行為だといわれている[SG, III, 11]。その一節ではマールの伝える皇帝ネロのいわゆる「黄金伝説」（子の妊娠を望んだネロが蛙を孕ませられる逸話）への言及があるのだが、そこには処女懐胎に対する作家の関心とともに、それが実際には不可能な願望であるという認識が読みとれる。何も産出することのないはずの行為から、にもかかわらず何かを引き出すことを創造と呼ぶなら、ブルーストの小説の試みはそうしたものとしての男色にも賭けられていたといえるかもしれない。世継ぎの絶えた名前というアイデアが含まれていない『サント＝ブーヴに反論する』のエッサイの樹はしたがって、すでに同性愛の主題と併存しはしていたものの有効な形で結びついてはいなかったということができよう。マリアとイエスの関係におけるような「奇蹟」がそこには生じようがないからである。

本論では紙幅の都合もあって、ブルースト的語源学・系譜学の概略を示すにとどめた。起源あるいは過去の探究を時間において、かつ藝術創造として行なうにはどうすればよいか。中世フランスが現代に遺した大聖堂のステンドグラスこそそのひとつのモデルだったわけだが、現代の作品は必然的にそれとは異なったやり方で創造されねばならないことが、ブルーストによる語源学受容のあり方に反映しているとわたくしは考えている。彼が語源学に何を託していたかについての理解や、またごく限定的に示唆された語源学の射程などに関して批評を頂ければ幸いである。

⁸⁴ MÂLE, *L'Art religieux du XIII^e siècle en France*, p. 167, la note 3.

⁸⁵ FRAISSE, *op.cit.*, p.339-349.